

'89総科カレンダー（前期）

編集部

これが総科の1年間です。いろいろ行事がありますが、月日の立つのは早いもの。見落とさないように、よくチェックしてください。（2年生以上の方は、今年度から学期区分に多少変更があるので要注意）

[4月]

○入学式（8日）

フレッシュマンになった気分、いかがですか？
様々な地方から集まった人間同志のカルチャー
ショックが新鮮な時です。

○新入生ガイダンス（10-12日）

総科って何なんだ？それに答える最初のガイ
ダンスです。わからないことはどんどん聞いて自
分なりに総科のイメージをつかんでみましょう。

○2年生コース決定・発表（4月上旬）

希望通りになった人、ならなかった人、なんと
なく選択した人、新しく決まったコースには、
さがしてみれば何か興味のあることがきくと見
つかるはずです。

○前期聴講受付（13-26日）

時間割は君の自由、自分で組みます。わからな
いことは先輩に聞きましょう。たいてい親切に
教えてくれます。学務へ提出した後は確認を忘
れないように。

○※各種奨学金、授業料免除の手続きもこの時期。

○新歓コンパ

初めての人も初めてでない人も、アルコールは
楽しく飲むもの。くれぐれもダウンしないよう
に、癖になり過ぎないように。ちなみに一度歌
うと何故か忘れられない“安芸の国”。

○オリエンテーションキャンプ（22-23日）

準備も当日も和気あいあいと楽しいのです。話
したことなかった人とも気軽に話せるチャンス！
体力の必要性を痛感するのもこの時です（オリ
キャンの後ともいえます）。



[5月]

○4年生教育実習（今のところ時期未定）

○春季総科ソフトボール大会

総科だけのイベントです。得意な人もそうでな
い人もみんな参加しよう。お弁当作るもよし、
ソフトの後は、また楽し、打ち上げです。

[6月]

○家庭教師講習会

厚生課で家庭教師の斡旋を受けたい人は、必ず
講習会に参加して登録すること。

○6月祭

森戸道路に所狭しと露店が並ぶのです。みんな
で協力して総科の店出しするのも良いんじゃない？
ついでに黒字ならもっと良いんじゃない？

○総科創立記念日（7日）

正確には昭和49年6月7日です。休みではあり
ません。

[7月、8月]

○夏休み（7月11日-8月31日）

50日とちょっと、あります。免許や旅行には絶
好の時です。バイトだっていろいろあるし、帰
省する人もいるでしょう。いづれにせよ9月の
嵐に備えて遊びまくる50日です。

[9月]

○前期試験

コピー機が人気No.1になります。とりあえず
この季節は勉強に励むべきです。試験の日には
学生証を忘れないように。学務に行けばどうに
かなりませんが、焦ります。

○秋休み（9月27日-10月10日）

前期も終わりました。一息ついたら遊ぶなりバ
イトなり、いわゆる現代の大学生生活を復活させ
ましょう。読書の秋だって良いのです。

賞 獲 天 貝 翁 学 科 合 議

目 次

学部長挨拶	1
コース・インフォメーション	2
地域文化コース	3
社会科学コース	4
新任紹介(その1~その8)	4,5,6,9,11,15
外国語コース	6
数理情報コース	7
物質生命科学コース	7
生体行動科学コース	7
自然環境研究コース	10
シリーズ数字“448”	12
My Impressions of Hirodai and Universities in Japan	13
就職委員の一所感	16
就職状況	17
就職体験記	18
退官の言葉(パート1)	20
街の総科“飛行機”	22
退官の言葉(パート2)	23
卒論題目一覧	24
飛翔箱	
「自己発見の旅」	30
「社会科学コースあれこれ」	31
編集後記	32

学部長あいさつ

総合科学部長 天野 實



卒業生諸君、卒業おめでとう。広島大学総合科学部へ入学して4年間所定の課程を終え、社会人としての門出にあたって入学時のことをしばし思い出してもらいたい。総合科学部が従来の専門指向型の学部ではなく、核

となる専門分野を持ちながら裾野の広い研究教育をする学際的な学部であることに魅力を感じたこともこの学部を選んだ理由の一つであろう。現代から未来の社会が必要とする人材はまさにこのような教育を受け、広い視野に立って物事に当って行く若者であろうと思う。自由な発想により物事を考えることではじめて創造性も生まれてくるものである。総合科学部はこのような信念のもとに先輩の諸先生方の努力によって創設された学部である。どうかこのことを忘れずに社会に出て活躍されんことを切に祈っている。

さて4年間に接した総合科学部の先生の顔を思い出してみてください。色々と強烈な個性をもった面々が浮んでくるだろう。建て前でなく本音で全力投球しながら生きている先生方に皆は接したことと思う。強く逞ましく、時にはがむしゃらにという表現がぴったりの先生の生きざまを体験したこともあるであろう。私は言いたい、失敗を恐れるな、しかし二度と同じ失敗はするな。皆は長い人生の間には色々な困難に遭遇するものだ。困った時には母校である総合科学部を思い出し、先生の許を訪れ相談に来てほしい。きっと有益な勇気付けが得られるであろう。先に述べた創造性と総合科学部の持っている強靱なる精神、この両者に裏うちされた人生を送ってもらいたい。

中国の古書に次のような句がある。「疾風知勁草、日久見人心」激しい風の吹いた時にはじめて、疾風にも吹き折れぬ強靱な草木がどれであるかを見分けることができる。日がたって、さまざまな出来事が起ってみてはじめてほんとうに信頼出来る人間が誰であるかがわかるものだ、という意味なのだ。社会に出たら色々な人と共に社会生活を送らなければならない。長い人生において最も大切なものはお互いの間の人間としての信頼関係である。それはお金では買うことの出来な

い信用である。色々なことが起った時に真心をもって誠実に対応してほしい。人間の信用は一度失ったら二度と取り戻すことは出来ないものだと肝に銘じて一日一日を送って下さい。

新入生諸君、入学おめでとう。色々な難関を突破して広島大学総合科学部へ入学した諸君、今日のこの感激をどうか長く持ち続けてもらいたいものだ。昨年の飛翔3月号の冒頭に「総科生はよく勉強します(?)。総科生はよく遊びます」と書いてある。これは本当だろうか?総合科学部創設後数年間の学生は確かによく学びよく遊ぶ学生が多かったとの声を聴く。最近の総合科学部の学生の中にもよく学びよく遊ぶ学生が多数いることも確かだが、この二つのどちらもありやらない学生が目につくようになったから上記のような先生の声を聴くのだろうと思う。

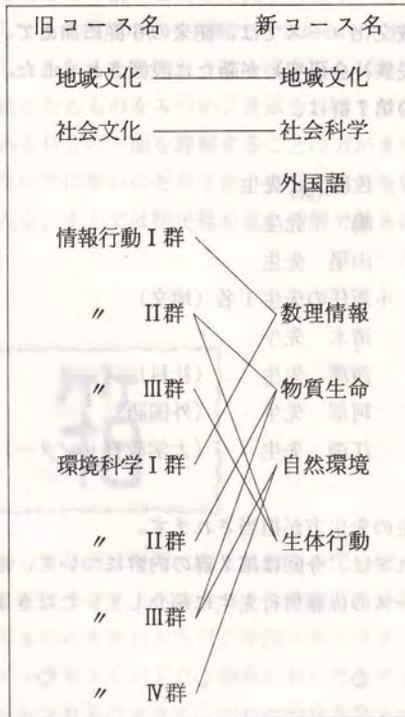
昨年春、全学の入学式の時にサミュエル・ウルマンの詩の一節を話した。「青春とは人生のある期間を言うのではなく、心の様相を言うのだ。優れた創造力、逞ましい意志、燃ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こう言う様相を青春と言うのだ。年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる」これからの4年間の学生生活を始めるにあたって必ず自分の目標を立ててそれに向かって頑張るしてほしいものだ。最初に立てた目標を途中で変更するのはかまわない。しかし目標のない生活をしてはいけません。大学又は学部が良いかそうでないかはそこの在学生と卒業生によって決まると言われている。総合科学部へ同じ時期に入学した学友の中には文系から理系まで色々な分野に興味を持った人達がいる。自分とは異なる分野に進もうとする良き友人を出来るだけ作る努力をしてほしい。又先輩後輩の学問を通じての強いつながり、人間的な交友関係を作り上げてもらいたい。総合科学部の歌の中にもあるように「恥も外聞も忘れて動く、それが総科の旗印。広大総科は世界にひとつ、世界にはばたけ総科生」

卒業生、新入生諸君の健闘を心から期待する。

コースインフォメーション

昭和63年度は、総科の新7コースが動きはじめた年度である。私達62生は、コース説明会等で、教官方の「新コースについては、まだはっきりしたことがわからない」というような言葉を聞きながら、コース選択をした。そして、もう1年が過ぎようとしている。

総科のコース改組の結果を見ると、文系コースにはほとんど変化がなく、理系コースにのみ大幅な変更があったことがわかる。それにより、理系コースの単位履修カリキュラムには大幅な修正が加えられた。コース改組による影響を受け、教官サイドに苦労があることは想像に難くないが、特に今回の飛翔では“コース改組1年目”ということで、学生サイドの意見を取り上げてみた。また新1、2年生へ向けてのコース紹介も兼ねてある。中には、意見を集めきれなかったコースがあったり、個人的な意見に終始している部分があったり、至らぬ点も多いが、どうか御容赦を。



新旧コースの対比



地域文化コース

伊藤多喜子

地域文化コースでは、従来の6群に加えて、第7群（民族社会研究）が新たに設置されました。

この第7群は、

佐藤^(信)先生
嶋先生
山尾先生
+新任の先生1名（地文）
清水先生
西澤先生（社科）
阿部先生（外国語）
江渕先生（大学教育センター）

以上の先生方が担当されます。

それでは、今回は第7群の内容について、地域文化コースの佐藤信行先生に紹介していただきます。



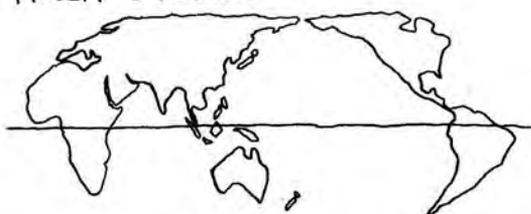
総合科学部地域文化コースの第7番目の専攻群として、「民族社会研究」群が昨年度（昭和63年度）より発足し、今年4月からはじめての2年次生を迎えることになりました。

総合科学部には、全国的にみてもかなりまとまった数の文化人類学担当教官がおりますが、各教官の所属するコース・群が異なっていたため、教育面において充分連携のとれたカリキュラムを組むことが困難でした。

またいわゆる「第三世界」と呼ばれていた地域を専門とする社会科学の授業も、まとまったカリキュラムとしては提供されていませんでした。

そこで従来のカリキュラムを見直し、これまで分散していた関連授業科目をまとめて、「民族社会研究」が地域文化コースのなかに開設されたわけです。

AREA STUDIES



こうした経緯をふまえて、この専攻群の授業は、コースを越えて地域文化・社会科学・外国語の各コースの関連教官が担当しています。そして『学生便覧』を参照すればわかるように、この専攻群は文化人類学を中軸にした編成になっていますが、そのカリキュラムは、国際政治学や国際経済学をも含んだ幅広い国際社会の理解を志向する構成をとっています。その理由は、学際的な地域文化コースの構成ということに加えて、文化人類学においても、これからはミクロな社会の研究ばかりではなく、マクロな社会システムをも視野に入れて、研究・教育を行ってゆく必要があるという認識からです。

こうして、この新しい専攻群は、上はマクロな国際政治・経済から下はミクロな民族社会にいたるまでのさまざまな社会システムの枠組みにおいて、地域的にはとくに「第三世界」（発展途上およびN I E S地域）に対する総合的かつ体系的な教育プログラムを提供します。

今日、日本をとり巻く国際社会情勢のなかで、これらの地域を理解するという課題はとみに重要度を加えています。この課題に応える今日的な国際感覚をもった学生たちが、この新しい専攻群から輩出してゆくことを希望します。

最後に、この専攻群では例えば次のような研究テーマが考えられます。「経済発展と農村の変容……韓国の場合」「複合民族国家における民族文化……インドネシア・バリ島を例として」「ラテン・アメリカにおけるメスティソ文化の形成」「太平洋におけるミニ国家……文化人類学の視点から」「タイの経済開発……地域開発をめぐる」「民族と国家……エスニシティをめぐる」など。

社会科学コース

宮 尾 佳 道

ガイダンスでもコース紹介がある筈ですが、コースの学生と直接話がしてみたい、雰囲気を知りたいという方は、総科大講義室前にあるプレハブ3号棟の2階に上がってすぐの、社会文化研究室に足を運んでみて下さい。時々閉まっていたりもしますがけれど、暇つぶしにはもってこいの場所です。

コースの学生としての感想ですが、社会科学コースは、とても所属意識の強い所です。2年次の英語に、社会科学コース学年全体のクラスができたので、何となく小中高とずっと過ごした学級と同じような気分で、他の学生と顔つき合わす事になりますから。

専門授業の内容については、本当に多種多様です。何しろ、“社会”などという範囲の広い代物が対象になっているので、各先生のアプローチの方法も様々で、良く言えば総合科学部らしい感じ、悪く言えば統一性のない時間割りができます。この辺に関しては、取捨選択の幅が広く、個人の好みと関心の問題

だと思うので、うちのコースの授業は面白いとか、つまらないとか、ハードだとか楽勝だとかいった紹介の仕方はちょっとできません。

ただし、カリキュラムについて不満がない訳でもありません。私事になって申し訳ないんですが、今この記事を書いている時点で、62生の私達はゼミ（ゼミナール。演習科目の事。学生は各ゼミの先生に、いわば“弟子入り”する事になります）の志望調査をやっています。こうして授業内容のリストをながめてみると、社会科学コースの理念、現代性、国際性、総合性etc…というのが見えてこないのです。入学して2年、自分は何故、何を求めて法学部でも経済学部でも文学部でもない、広大な総合科学部に入ってきたのか、改めて考えさせられる場面でした。

先ず、社会人類学—社会的文化的側面—をやっておられる先生が一人しかいらっしゃらない上に、本年度はゼミがないのが目に付きます。ちなみに文化をやりたい学生は地域文化コースのゼミを受けよとの事、それって、社会科学コースに行った意味は何だったんでしょう。次に社会心理学がない。これは生体行動科学コースの分野なんだそうです。そして何より、社会学…つまり法学でも経済学でも史

新任紹介 (その1)

清水典明

12月1日に着任して、早くも1ヶ月が経ちました。私は背が高く(184cm)、昔からよく目立つようなので、もう御承知の方もたくさんいることと思います。私は、京大農学部食品工学科を卒業した後、理学研究科大学院生として京大ウイルス研究所で5年間研究を行ないました。内容は、当時その臨床応用が社会的に注目されていたインターフェロンについて、その作用機構を、生化学的、細胞生物学的に調べようとするものでした。具体的には、インターフェロンにより細胞内に誘導される2'-5'一フォスフォジエステル結合をしたアデニル酸)の合成酵素に関する研究でした。大学院修了後、山之内製薬(株)に入社し、東京・板橋にある生物科学研究所に於て、遺伝子工学を中心に、蛋白質化学、細胞培養といった技法を用いた研究を行なっておりました。山之内には5年8ヶ月間在職しました。その間、大学ではなかなか得られない、有形、無形の貴重な経験をしたと思っております。それは、1つには産業界の構造を知ること。また、1つには、無制限の研究費と最高の設備で、企業の研究戦略、技術といったことを身につけられたことです。一方、ここ1、2年程で、「バイオ」を用いた医薬品開発の世界は、1つの終焉を迎えた感が有ります。生体内生理活性蛋白の発見→遺伝子クローニング→量産という、それまでのパターンがあまりにも単純すぎること(ようやく)気が付き、新たな展開を強いられる時期にきました。必ず来るだろうと思われる「第2のバイオ世代」を前にした、一番苦しい時期に会社を後にするのは、後髪をひかれる感が強かったのは事実です。しかし、大学の自由な環境に再び戻ったとき「こここそ自分の生きる場所」という思いがするとともに、自分自身が活性化されてゆく感がしました。東京の、殊に板橋区の騒音、排気ガスに包まれた殺風景な街から、自然と都市が調和した街、広島へ移って、今、やる気に満ちています。顔を見かけたら、気軽に声をかけて下さい。

(物質生命科学コース 基礎科学研究)

学でもない…そのものズバリの社会学を専門にやっておられる先生の絶対数が少ないんです。ゼミの数で具体的に言うと3つ。(これは89年度の話です。皆さんがゼミを受ける91年度には増えている筈です)そして各ゼミの学生が3名という事になっているので、今年など、あるゼミは競争率が2倍以上という(調査結果は1.7倍になりました)、受験を連想させる倍率になっているのです。

こうしてゼミ決定の事について述べてきたのには、自分が直面している、という以外にも理由があるのです。社会科学コースは、事ゼミの決定に関する限り、総科一早いコースなのです。2年の後期末にゼミを決めて、3年前期にはもう授業に入ってしまう。社会科学コースに入る事が決定した一年後には、ゼミ、つまり自分は一体何を学びに大学に来たのか、という事を決めねばならない訳です。

ですから、社会科学コース志望の新入生の方は、なるだけ多人数の先生の授業を取ってみて、選択の幅を広げ、自分がどの方面に進みたいのか、2年次

までに大体の目星をつけておく事をお勧めします。

すでに社会科学コース行きの決まった新2年生の皆さんは、そろそろゼミの目標をしぼって勉強されるとよしいのでは。さもないと私のように土壇場になってあわてふためくといった醜態を演じる羽目になってしまいますので。

とはいえ、大学にモラトリアムを求めてやって来たのでない以上、社会科学コースに限らず、いや、総科に限らず、目的意識を常に持ち続ける事は、本来必要な事であり、当然の事である筈です。その意味で、社会科学コースのゼミ決定スケジュールは、私達学生に、何をやりたいのか問いかけているように思える今日このごろなのです。



新任紹介 (その2)

松岡 俊二

というわけで、だから何なんだ、と考へながらも新任紹介の原稿を書けと言われて、ここで「イヤダ」と言うのも大人気無いと思ひ直して、深夜ディスプレイに向かってキーボードをたたいているのが昨年10月にやってきた経済学(国際経営論)の教官・松岡です。

僕は1957年兵庫県豊岡市に生れて(知らない人には、志賀直哉『城崎にて』の舞台・城崎温泉のとなりと説明しているが、それでも通じない人には知ってほしいとは思わない)、18年間そこで暮しました。その後、5年間大阪ですごし、8年6カ月を京都で生活して広島にやって来たわけです。

したがって僕は関西人です。以上から形式論理学・三段論法の結論として、僕はタイガース・ファンです。しかし、関西生れ=関西人=タイガース・ファンという図式は極めて皮相な形式的理解です。なにを隠そう(別に大層に気張る必要もないのですが)、僕は中学生の頃まで読売のファンだったのです(関西には多分に侮蔑を込めて巨人のことをジャイアンツとは言わずに読売という)。しかもこの事象は、

僕の周りの多くのタイガース・ファンに共通しているのです。即ち、関西では自分の頭で考える=大人になる通過儀式として読売からタイガース・ファンへの転身(決して転向ではない)が観察されるのです。

この観察から有意な学問的成果を導出する事は、文化人類学の課題となりうるが経済学の課題ではない。だが、以下の結論を導き出すことは可能だろう。関西のタイガース・ファンは自らの選択としてタイガースを選んだのであり、なんとなくの読売ファンとは明確に区別され、またこの点からタイガース・ファン=殉教者説は相当の説得力を持って主張しうるのである。

書いているうちにアホらしくなってきたのでもうやめます。この原稿がボツになっても誰も恨みません。しかし、今年、僕はタイガースの試合を見たとは思いません。僕もすでにして殉教者なのです。合掌。

(社会科学コース)

外国語コース

中田真帆

何か、総科であったコース変更の余波について書いて欲しいということだったが、取りあえずうちのコースにはあんまり関係なさそうなので、このコース独自の問題に触れてみたい。

まず何と言っても、当面の問題は、「生徒の数に比べて講座の数が多すぎる」ということであろう。新設コースということで、先生方もはりきって、ポコポコと講座を設けて下さった。——のはいいのだが、まだそれに見合うだけの人数が生徒側にそろってない。3年生に至ってはたったの10人なので、5セメ、6セメ以上の授業になると、1人や2人で受けるものも、そう珍しくない。中には生徒が全く来なかったで、ついに開かず仕舞だった講座もあったとか聞く。もったいない。

「もったいないなら行きゃいでしょ。外国語コースは1対1の教育が売り物なんだから。」

いや、しかし、まあ中には題目からして全く食指の動かない講座もあるのであった。

「10人が10人ともそうなんですかー？」

実際そうなのだから困ったものである。

61生は全体として、「文化と言語の関係」みたいな方向へ行きたがる傾向を示している。だがこの方面は今流行^{はやり}みたいなんだし、実社会へ出て役立つ（と思う）ので、これはいた仕方ないことだろう。

しかし、この方面に関しては、反対に授業数の方が少ない。生徒の方が多い。うちのコースもほとんど取る。他コースからも来る。あまつさえ他学部からもお出ましになる。生徒のインフレである。

卒論もこの方面のテーマで書きたい、という人が多い。どうも、文学や普通の言語学は、個人の趣味のレベルにとどまっている感が強い。（もちろん、そうでない人もいるけど。）

外国語コースは「実社会に対応していける語学力を」という触れ込みで発足した。しかし、その割にはあんまりそういう感じのしない、学究的な授業が多いような気がする。

「いやしかし、大学とはやはり研究の場なのだ！」と言いきってしまえばそれまでだが、ますます多くの若者が大学に進学する昨今、大学側もいつまでも象牙の塔でいて社会不適応者ばかり生み出してもいけないと思うのだ。

その点総科はまだまだ発展の余地のある学部だと思う。外国語コースも若いのだから、あっさりと体制を固めてしまわないで、常に新しい可能性を求めて前進して行って欲しいものである。

新任紹介（その3）

開発一郎

昨年11月中旬に着任しましてから約2ヶ月が過ぎましたが、その間公私共に目まぐるしく変わった環境についていけず、ついに風邪をひいて初めての広島のお正月は夫婦でまさしく寝正月となりました。しかし、広島は暖かく（今冬はとくに暖かい？）、食べ物も酒も水もおいしくて生活は今のところ快適です。

広島大学は大学の規模の割にはキャンパスが狭く、教育・研究環境が悪いのにはささか驚きました。私の研究室も学生と同居のプレハブの部屋で、人によっては国鉄時代の廃棄貨車を研究室にせざるを得ない方がいらっしやると聞いてまたまた驚いております。いずれにしても、東広島市への移転までは現実にはこの状況でやらねばならないのですから、教育・研究を進めるに当たってはかなりの創意・工夫がいるな—という実感があります。移転が大変待ち

遠しいです。

私の教育・研究分野は水商売の水文学（すいもんがく）を主体（とくに降水・蒸発散・土壌水・地下水を研究対象としている）とした自然環境研究です。夜の酔者学も嫌いではありませんので、広島大学が繁華街に近いのは、誘惑が多くて多くて……。

誇りある広島大学の一員として教育・研究に大いに励みたいと思っております。どうかよろしくお願いいたします。

（自然環境研究コース）

数理情報コース

ちょっとしたインフォメーション

布川克彦

簡単に言うと数学とコンピュータです。「無限への挑戦」より引用させていただくと、(読んでると思うけど) *抽象化によって問題を単純化し理論を構築する科学的手法を学ぶための数学* というのが、群論などの代数学、位相空間等の解析学、トポロジーなどの幾何学。(普通の数学、って気もしますが……) *不確定な現象を解明し、その特性を明らかにするための確率および統計* は確率、統計はもちろんのこと、計画数学、グラフ理論といったものも学習します。*コンピュータの構造と機能や、情報処理の理論……* これなんかは、計算機実験、デジタル回路などです。この次に「ロボットとコンピュータ」という写真がありますが、きっと卒論を書く時までこうだったことには、巡り合わないでしょう。楽の前には苦があるものです。こんなところですが、何にでも「光と影」があります。実際、数学とコンピュータ、両方をカリキュラムどおりに履修すると、ちょっとたいへんなので(もちろん“優”を目指して勉強した場合について)2年の終わりくらいには、どちらかを自分の専門にして、好きなほうに力をいれるみたいです。コンピュータに関して言うと、ハードの方は理論のみでICの回路を実際で作る実験なんかはしません。しかし、ソフトの方なら高級言語ならかなりしますし、(今はやりの、C、PROLOG、なんか)OS、コンピュータネットワークについての講義もあります。基本的には理論中心です。ただ、何分新しい事が多いので講義だけで全てが分る、とはなかなかいかないようです。二年の終りともなれば、情報処理技術者試験の二級くらいならきっと合格するでしょう。とは言っても大学では何もしてくれませんから、問題集を自分でやる位の努力は必要です。就職は、研究職に就きたいというのであればそれなりによい成績でなくてははいけません、そうでなければ心配することはありません。(女の子でも、四年で卒業する人だけに関して言えば、理系のほうが重宝されますから、へたに文系にいくよりいいかもしれません)

最後に、微積分と線形代数はやってください。全然してないと、(僕の様)にきつとこまりますよ。

物質生命科学コース 生体行動科学コース

昭和62年度のコース再編成に伴い、物質生命科学コースと生体行動科学コースが新しく出発しました。なにぶん所属学生もまだ一年目であり、また両コースにまたがったグループもあり、ここでは一応まとめて扱います。よく研究して下さい。

物質生命科学コースの 物質科学グループ

水谷文彦

物質生命科学コースは昭和62年度のコース組織再編成に伴い、旧情報行動科学コースII群の一部および旧環境科学コースIII群の一部と、旧環境科学コースII群が統合され設立されました。

物質生命科学コースが設立された理由は大別するとふたつになるでしょう。ひとつは時代の要請であり、もうひとつが総科の要請です。

時代の要請とは、あらゆる分野において、ますます学際的色彩が強まり、異分野同士の協力が重要になってきている時代において、科学の分野も例外でなく、物理学、生物学、化学の各分野も、その協力や統合を通じて時代に依っていかうとするものです。

また、総科の要請とは、設立当初の総合科学部の基本理念に立ち返り、改めて総科の存在意義を問い直そうとするものです。

以上のような理念により設立された物質生命科学コースでは、物質や生命の現象にひそむ基本原理を理解し、物性や生命体の機能と制御機構を研究教育し、資源エネルギー、情報、医療に関する新素材開発——たとえば、有機太陽電池、バイオ素子など——と、バイオテクノロジーの先端的研究を行います。

さて、簡単なコース紹介を行いました。弱輩者ゆえ舌足らずの文章になったのではないかと思います。理解に苦しむことや質問などありましたら、是非、物質生命科学コースの先生方に会って話を聞いてみて下さい。とくに、私の指導教官であった檜原教授は“仏の檜原”と異名をとる素晴らしい先生です。ぜひお話を伺って欲しいと思います。

両コースにまたがった 生命科学グループ

福永弘樹

コース改組に伴い、生命科学の研究グループ（旧情報Ⅱ群、環境Ⅲ群）は、物質生命科学コースと生体行動科学コースに再編成された。これにより、生命科学を目指していた62生と63生の学生は、コース決定にあたり少々混乱した。私は、生体行動科学コースの行動科学の人間だが、生命科学グループの友人に、物質生命と生体行動の生命科学グループは、実際はどのように違うのかを聞いてみた。

一言でいうと、両コースでやる生命科学の内容は変わらない、ということらしい。違ってくるのは、各コースごとに選択必修科目群が異なっているということである。例えば、生体行動の生命科学グループの学生は、行動科学グループの専門科目は自コースの選択必修科目であるが、物質生命の学生はそうはならない。また、実験や外書講読の選択必修も同じような状況である。詳しい様子は学生便覧を見て

欲しいと思います。

また、専門で教官につく場合、生命科学グループの教官は、物質生命科学と生体行動科学の両方に所属するという形になっているので、学生は、原則としてどの教官にでもつくことができるようです。

また物質生命の学生は、2年後期になってもまだ物質科学・生命科学のうちどこに進もうか決めていない学生もいるということで、コース内だったら、変更が可能であるという状況のようです。

以上、他分野の私が、自分で見て友人に聞いて物質生命と生体行動の、主として生命科学グループについて書きましたが、まだ間違いがあるかもしれません。くわしくは、教官の方、学生の方、事務の方によくたずねるようにして下さい。

生体行動科学コースの 行動・健康科学グループ

福永弘樹

生体行動科学コースは、生体科学（生命科学グループ）・行動科学（心理学グループ）・健康科学という分野で構成されている。これは旧情報行動科学コースのⅡ群の一部とⅢ群に、新しく健康科学が加わったという形となっている。しかしコース内では、生体科学と行動・健康科学は、授業・実験のカリキュラムが異なり、大学で顔を合わせることが少ない。つまり、“生体行動科学コース”という1つの集団意識は少ない。

私は行動科学に進もうとしているので、新コースになってのこのグループすなわち心理学グループ（旧情報Ⅲ群）について書いていきます。

新コースになり、最も大きく変わったことは、2・3学年における実験です。旧コースでは、心理の基礎実験2単位、特殊実験2単位だけだったのが、新コースでは、前記の実験の他に、心理以外の実験を

2年次に1単位、3年次に2単位必要となりました。多くの62生は生物学基礎実験1単位、健康科学実験2単位を取ると思います。

このように実験を多く受講しなければならなくなったことにより、旧コースと同じ、心理の基礎実験、特殊実験の内容も少し変わったようです。学生の実験の負担が重くなった分、心理の実験の負担（レポート、グループ発表）は軽くなりました。また、学生数が約2倍（61生10名→62生18名）になったことも関係があるのか、実験の遅刻者が多く、62生が怠惰であるように思います。

また授業科目は、2年次では、旧コースのときより心理の専門科目が少し減りましたが、内容的には変わっていません。心理の教官は、杉本、上里、黒川、藤原、堀、生和教官そして今期より、林教官が加わり、授業での内容も教官により決定するので、内容的に変わっていないのは当然のことでしょう。

新コースになっての行動科学（心理系、旧情Ⅲ）は学生数の増加、修得実験の増加が大きく変わったことといえます。そして、他のコースと違うところは、先輩の被験者を2年生がやることや、心理の実

験に教官の補佐として先輩が参加してくれることにより、他のコースよりは、縦のつながりが強いように思われます。

それでは次に、行動科学では、何をやっているのかについて書いていきたいと思います。行動科学には、生理心理（杉本・堀教官）、臨床心理・パーソナリティ（上里・生和教官）、社会心理（黒川・藤原・林教官）という3つの柱があります。行動科学では2年次・3年次前期迄、心理系全般の実験を行い、3年次後期に、それぞれの3分野に分かれます。また、行動科学は、もと文系の学生が多いので、コンピュータ学習に不安を持っている1年生が多いようですが、それは全く心配いりません。コンピュータ学習については、理系も文系も全く初めてで、先輩に聞けば親切に教えてくれます。

最後に、行動科学では各個人が自分で調べることが重要です。そのため、心理専門書が置いてある図書室があり、学生はいつでも本を借りることができます。

なお、新しいグループとして健康科学グループがあります。これについては、私はよく判りませんが、くわしくは、教官、先輩、事務の方にたずねてください。



新任紹介（その4）

和田正信

昨年11月に、筑波大学から赴任しました。「今度は広島か。ずいぶん遠くなったな」という、田舎の友達からの今年の年賀状に示されますように、広島というと、岐阜出身の私には高校の修学旅行で訪れるか、さもなければ九州方面に所用の際、新幹線で通過するところだと、ついこの間まで思っていました。その土地にいまこうして住んでいる自分を思うと、巡り合わせの面白さを感じずにはおられません。さて、自己紹介ということですが、広島大学についての雑感を、保健体育講座所属ですので体育と関連して述べることで、それに代えさせてもらおうと思います。

昨年7月に、広大を訪れる機会がありました。構内に入り、まず目についたのは、立ち並ぶ格調高い（古いとかボロいとかいうような他意はない）建物でしたが、母校の岐阜大学で同じ様な建物に親しんできた私は、それにはたいして驚きませんでした。右手にグラウンドが見えたので、行ってみるとサッカー部の部員が練習に汗を流していました。初めてそこを見る多くの人がそう思うのと同様に、私はそのグラウンドをサッカー場だと判断しました。着任後、私の専門が陸上競技である関係から、陸上部の練習を見に行こうと思いましたが、どこに行ったらよいのやら分らず、ある先生に「陸上競技場はどこにあるのですか」と尋ねたところ、その先生はボカソとした顔をされしばらく間をおいてから、南グラウンドの位置を話されました。（おかしい、あそこはサッカー場のはずなのに）とひとりでブツブツ言いながら歩いて行ってみると、確かにサッカー部に加え陸上部が練習していました。ついでにラグビー部とホッケー部も練習していました。

その時初めて、当初サッカー専用グラウンドだと思っていたその場所が、サッカーにも陸上にもラグビーにもホッケーにも使用可能な多目的グラウンドであり、さらにそれぞれの活動時相を特に配慮する必要なく、それらを同時に行うことのできる多機能的な性能を備えたグラウンドであることに気付くと同時に、いくら移転前とはいえ、そのような使い方をしなければならぬことを余儀なくされる環境の悪さに、驚くしだいでした。

研究は運動・発育による骨格筋の変化を中心に行ってきましたが、こちらに来てまだ態勢が整っておらず、現在はストップしています。1日も早く実験を再開できるよう現在努力しているところです。今後とも宜しくお願いします。

（生体行動科学コース・保健体育講座）

自然環境研究コース

横山卓生

自然環境研究コースは旧環境科学コースⅢ群、Ⅳ群に相当します。以下、その変更になった点を説明いたします。ただ他の群とはっきり区別つかない点がある為、環境科学コース全体として話を進めている場合もあることを、知っておいていただきます。

○授業科目

コース改組に伴い科目も改編された。がしかし大きなものは変わっていない。もちろん新しい授業もできている。

○実験

基礎実験が一般科目から専門となった。また環境科学実験は5セメ、6セメにそれぞれⅠ・ⅡとⅢ・Ⅳを受講する。Ⅲ・ⅣにはそれぞれA・Bがあり学生の望む組み合わせが可能になる。

○実習

環境科学野外調査A、Bが環境科学野外実習Ⅰ～Ⅳとなった。大山巡検、臨海実習などが計画されている。これには他コースの学生も参加することができる。

○学生数

Ⅲ群20名、Ⅳ群12名（コース定員50名）から26名（同30名）となった。

○教官（教）

前コースから物理・数学・化学の一部（生命に関する）・生物（動物に関する）の教官方が他コースに行かれたという状態である。

○学生の雰囲気と勉強意欲

数名の教官に尋ねたが、まだわからない、あまり変わってないのでは、という答えが返ってきた。

我がコースの紹介

大きく化学・生物・地学・地理の4系に分けることができます。自然を対象とした学問なので、「まず自然へ」という理念を持つコースといえるでしょう。野外実習も多くそれだけコース内の結びつきは強いと言えますが、総合科学部の創部時の目的を思えば細分化し凝り固まるのは良い方向に向かっているとは言えないでしょう。とにかく様々な方面の研究が可能な魅力あるコースです。

質問に対する回答

○「公害の勉強はできるのか」

できます。しかし公害の何を勉強するのでしょうか。その性質も仕組みも様々です。工場の煙が原因の大気汚染を例にとると、汚染物質発生には化学系、その移動拡散には風向・風力といった地理系、生物に及ぼす影響は生物系といった具合に色々複雑です。またその解決に一番良い方法を探るのにも多様な学問が必要です。しかも突き詰めることが要求されます。生半可な知識では役に立ちません。つまり公害解決に自分の研究を適応させればいいのです。

○「就職先について」

昭和52年度卒から61年度卒まで計233名います。そのうち94名（40.3%）が進学、20名（8.6%）が公務員、22名（9.4%）が教員、83名（35.6%）が企業、3名（1.3%）が自営、11名（4.7%）が無職（研究生・聴講生を含む）となっています。企業の内容として、建設業、製造業（食料品、化学工業、金属製造、電気機械器具など）、情報処理業などがあります。（資料提供：厚生補導係）



新任紹介 (その5)

櫻井直樹

出身高校は兵庫県の六甲高校。中学からの一貫教育の学校に高校から編入したため苦勞し(入った時にはもう数Iが終っていた)、卒業するまで落ちこぼれてきた。授業が苦痛で体育と音楽の時間だけが待ち遠しい高校生活でした。東大の入試が大学紛争で中止になった時、阪大をあきらめて大阪市大を受験、その時第3志望に書いていた(何を書いたのか入試の発表の時は忘れていた)生物に合格し、現在に至っています。専門は植物生理学で、植物がどうやって成長するかということ、物理・化学的手段を総動員して調べています。

総合科学部には9年前アメリカのアイオワ州立大学から赴任しました。博士をとっても日本で就職するあてがなく、これが終って就職がなければ研究生生活はやめようと、アメリカでポストドクとして研究していました。むこうでは渡り鳥のようにアメリカ各地のポストドクを妻子を連れてわたり歩いている人を多く見(ポストドクは最長3年契約)私にはこの生活はできないと感じたのを思い出します。私の就職が決った時、そういう人達が送別会を開いてくれたのですが、申し訳なくて身が細る思いでした。

こちらに来て最初の研究費で買ったのがAppleIIというコンピューターで、30才で始めてBasicを憶えました。この9年間元は十分取ったと思える程使い、昨秋16ビットを飛び越してMacIIを買いました。コンピューターは人間の仕事の能率を10%上げてくれれば上等で、遊ぶ方がずっとおもしろい(この原稿も手で書いています。但し辞書を5回引きました)。

高校時代に始めたギターは今も弾いていますが、バロック・バッハを弾いていると、段々ロマン派に移り近代に来て、また飽きてバッハにもどるというサイクルをもう3~4回経験しています。20数年前聞いて心に強く残っていた作品が、サティであったことをつい最近知りました。

小学校の卒業式の時全員が自分の将来の夢を全校生徒の前で発表したのですが、私はベルスのような科学小説を書きたいと言いました。研究の深みにはまってしまった現在、これは夢で終りそうです。

(自然環境研究コース)

新任紹介 (その6)

吉村慎太郎

地域文化コースで主として「中東」の現代政治史を担当する吉村慎太郎です。1988年10月に広島大学に着任する前の約1年半は、在イランの日本大使館に専門調査員として勤務しておりました。

「中東」といっても、私がこれまで研究してきた地域は地理的にその東の外れに位置するイラン及びアフガニスタンであって、その意味で南西アジアと呼ぶる地域です。それは西のアラブ世界と東のインド世界の狭間にあって両世界から、又19世紀以降はこれに加えてヨーロッパ諸国から政治的、経済的、或は文化的影響を受け、歴史的にダイナミックな変容を遂げてきた地域です。大学時代は12世紀のインドにおける「スーフイズム(聖者崇拜)」に関し勉強し、又そのテーマで卒論も書いたのですが、79年のインド、パキスタン、アフガニスタンへの旅行中に折しも勃発したカブールでのクーデタに遭遇し、以来現代史に強く関心を引かれるようになりました。

あれから丁度10年が過ぎ去った訳ですが、その間のことを思い起こすと、私は「人との出会い」に何と恵まれてきたことか感謝の気持ちで一杯になることがあります。私の研究テーマの変更等に関し極めて有益なアドバイスを与えてくださった東京外語大学のN先生や東大のI先生は言うに及ばず、大学、大学院時代の友人、そして訪問したイランやアフガニスタンで暖かく迎えてくれた現地の人々との出会いがなかったならば、今日まで研究関心を持ち続けてこれなかったのではないかとさえ思います。

広島大学の皆さんと今後中東現代史の授業やゼミで御一緒させて頂く訳ですが、そこでは書物を通じて得た知識や考え方だけでなく、こうした「人との出会い」の中で吸収したことも多くまじえて授業に取り組んでいきたいと思っています。どうか宜しくお願いします。

(地域文化コース・アジア研究)

人は誰でも躊躇と前進の繰り返しで一步一步成長してゆく。あるいは、それが人生という階段にたとえられるかもしれない。階段を登るうちに扉につき当たることもあるだろう。その扉を開けなければ、新しい世界は見えてこない……。

全国のハイティーン達はある種の憧れを抱いて大学の門をくぐる。日本で最高にアカデミックな世界を少しでも垣間見ることができるのではないか、という。そして象牙の塔の頂上を目指して螺旋の階段を登り始める。しかし、塔を登りつめるまでにはいくつもの白い扉があるのだ。

現在、総合科学部棟及び自然科学棟には448枚の扉がある。扉の向こうにあるのは当然、講義室、資料室、実験室、事務室、学生研究室、教室等々だ。(中には開かずの扉もいくつか存在している。あれはいったい何なのだろう。) 気になるのは教室の扉である。特に自然科学棟の薄暗い廊下にはミステリアスな実験器具、計器類が所狭しと並んでいて、それらに埋もれているかのように教室の扉がある。総合科学部に教室として使用するべき部屋が不足しているのは一目瞭然で、一度でもどこかの教室を訪ねたことのある人なら必ず、一部屋に数人の教官、大学院生が同居しておられるのを目撃しているはずである。その当然の成り行きとして、移転後の教育学部棟の空室獲得のため、水面下での熾烈な闘いが繰り返されているとか……。

しかし、それにしても、教官方はなぜ御自分の所在を隠そうとなさるのか。教官方の部屋の移動は学生の引っ越し並に多く、また特に新しく赴任して来られた教官は教室にネームプレートを掲げていらっしゃらない。教室の配置もコースによるある程度の規則性はあるものの、例外が多すぎる。そのためかなり総科の建物の内部構造を把握した学生でも、教官の名前だけで当てもなくその所在を突き止めるのはまず不可能だ。それゆえ、つい事務官の方々のお世話になってしまうのだが、自然科学棟にいたってはその事務室の存在場所さえ謎となっている。



教官を探すのは、まるであの、お正月に遊ぶ、すぐろくの上がりか、巨大迷路の出口を探すようなものである。

この状況はいったい何から発生したものなのだろうか。少し意地の悪い見方をすれば、所在を公表しないということは、すなわち、自分に関係のない外部社会を遮断しているのだという意味に解せる。特に、うとうしい学生達が訪ねてくるのを避けているのではないかと思える。

もし一人の学生が、自分のたたいてみたい扉を探しているとき、その扉がなかったら、見つからなかったら……。彼はそのことで自分の歩む道を踏みはずすことはないにしても、もしかして塔を登るエネルギーを少しだけ、ほんの少し、失ってしまうかもしれない。それとも、見えない扉を探ることが、新しい世界への入口を自分で探すこと自体が、我々学生に課された宿命のようなものなのだろうか。

総科の塔にある扉の数は448。もしかして見えない扉はまだ無数に存在しているのかもしれないが。学生達はきっと今日もどこかの扉をたたいているだろう。

My Impressions of Hirodai and Universities in Japan

by Harold Kerbo, Fulbright Professor, Hiroshima University, 1988-1989

I would like to begin this note by thanking all of the students, faculty, and staff at Hiroshima University for making my year here a very pleasant one. I leave with considerable regret that I can not stay longer, and I do hope to return to Japan and Hiroshima before too long. And I would like to invite all of you to visit me when you are able to come to the United States.

As I am preparing to leave Japan I can give you some impressions that I have formed of Hirodai and universities in general in Japan, with some comparisons to the United States. When I say comparisons this in no way implies criticism of either Japan or the United States. One thing my background as a sociologist has helped me do is to realize that because of differences in culture and social systems some of the differences I will note are necessary and even to be admired.

What I have said above can best be explained with the first observation I will make : Yes, college students in Japan do not work as hard as American college students, at least on the undergraduate level. After being here for one year, however, I believe that this view is rather overstated, though still accurate. There is an important reason why Japanese students have less work than American students, which is primarily related to how hard you must study to enter college while you are in high school. On the high school level American students usually do not work as hard. A result of this is that Japanese high school students score much higher than American students, but the gap is reduced by the end of college with more difficult study in American colleges. One response might be that Japanese students should also study hard in college so they remain way ahead of students in other countries after college as well as after high school. But there is a problem with this idea. Because of the years of study during high school I believe it is accurate to say that American students are more advanced in social skills when they begin college. By social skills I mean feeling comfortable away from your family, especially in social activities and dating. This is something that Japanese college students need after being isolated in study rooms before college. As an example of this, I read the report of a survey in the *Japan Times* which said that only about 20 percent (I do not remember the exact number) of high school students in Japan have kissed a girl or boy before finishing high school. American students would find this very surprising. I am certainly not suggesting that Japanese students should work on their kissing skills, nor am I saying that all of the hours studying before college causes this difference alone. Part of the cause is the past use of the Omiai system to find marriage partners in contrast to the more free "marriage market" in the Western countries. In the United States the college years are important for "dating and rating" people of the opposite sex to find a compatible mate (though the high divorce rate in the U. S. may suggest that it is not always done well). The point is that the social skills can be and must be learned in the high school years in the U. S. while in Japan you can catch-up in college, and you in fact should do so. (I might also note that now it is not so uncommon on American campuses for men and women students to be living together as if married : something I would be surprised to see in Japan.)

Another contrast to American colleges is the number of classes you take each term and the books you are required to read. In American colleges you would be required to take only four

or five subjects each term, but you would attend class three to five hours each week for each of the classes you take. With fewer classes there is also much more reading for each class. In my classes in California, for example, I require my undergraduate students to read a 600 page text book, or three or four other books in each class. They are also required to take three or four exams and write a 15 page term paper.

One contrast I believe Japanese students and faculty will find very surprising is the degree of student influence on hiring, promoting, and firing of American professors. While my own university is somewhat more involved with student "in-put", it is not uncommon in the U. S. Every year all of my students one term must write an evaluation of my teaching. Also, other faculty who are senior to the professor will come into the class to evaluate the professor's lectures. If the student evaluations are bad for three years without significant improvement then that professor will not receive promotions, and if bad enough, that professor will no longer have a job. American professors usually hate this process of evaluation, but I do believe it is useful in improving the quality of teaching in some American universities. (Think about this. This means students can have a big influence on how much a professor gets paid. It would be unheard of in a Japanese university and is controversial in the U. S. as well.)

Finally, I would like to note a striking difference between government funded universities in the U. S. and Japan. Having been to Japan three other times I was aware of the difference, but not prepared for the shock of Hirodai. The buildings are terrible. I have seen the buildings at Todai, but Hirodai is much worse. But I do not want to be very critical, and I am exaggerating, of course. One reason I do not want to be overly critical is that I believe that Japanese universities save money on the buildings and maintaining them so as to buy more things such as books. I see more books, and more up to date books, coming into faculty offices here than in the U. S. Also, we must realize that much of the Hirodai campus was built soon after World War II when there was not much money to spend on buildings. The new Hirodai campus looks as if it will be much improved. Overall, however, I believe the relatively dirty and drab Japanese government buildings are related to a Japanese characteristic which America has been criticized for to some extent. Personal space (your home, car, etc.) is seen as much more important than the public space (government buildings, parks, museums, etc.). This will change as Japan becomes more affluent, but I doubt that either Japan or the U. S. will devote as much resources on these public things as did many European countries at the time of their economic dominance in the world.

新任紹介 (その7)

林 春 男

昨年9月1日づけで、生体行動科学コース人間行動研究講座に着任した林春男です。それまでの5年半も、やはり「ヒロダイ」にいました。もっとも「北のヒロダイ」、弘前大学のことです。本学では「応用社会心理学」を担当します。耳新しい領域名です。こうした授業科目名があるのは、わが国でも広大総科だけだろうと思います。わたし自身は、私たちが実際に生活している際に出くわす問題、とくに人間の行動や人間関係の問題を科学的に究明しようとする学問が応用社会心理学である、と理解しています。この領域がどのように内実を豊富にし、どこまで発展できるかについては、まだ未知数なところもあります。たくさんの人に興味をもって欲しいと考えています。とりあえずは、「人間関係論」を通じて、現在の都市化社会のなかで人々のきずなのあり方がどのようになるのかを、また「集合行動論」を通じて、さまざまな災害場面における人間の行動の検討を、足がかりにしてゆくつもりです。こうした新しい芽を育てる場として、広島は格好だろうと期待しています。宜しくお願いします。

(生体行動科学コース 人間行動研究)

新任紹介 (その8)

青 木 孝 夫

広島大学の門をくぐると正面左手に見える建物が、私の所属することになる総合科学部の講義棟及び研究棟であった。秋の日差しを受けて白く輝くその建物も、内部に足を入れると、節電のために照明を落としたせいか、薄暗い。

今日、大学を〈象牙の塔〉のイメージで捕らえることも、〈真理の府〉と考えることも、時代錯誤の業である。学外に於いてすら、そうである。実際、象牙の塔の照らす光りは弱く、現代を歩む我々の足下を十分に照らしてはくれない。まして、その光りは、前方にあるべき目標を示してくれない。しかし、階段くらいは自分で昇れる。辿り着いた5階の比較文化の研究室からの眺めは良かった。

南の方に、青く霞みながら山々が並んでいた。見えはしないが、その麓には瀬戸の海も横たわっている。そう思うと、何やら愉快になった。眺望のきくということは、それだけでも人を愉快にするらしい。山は憧れを誘う。人生の一時期にこうした展望に立ちあふること自体、仕合わせなことだ。束の間のことと承知しながらも、そう思っていた。

看板と幟のことを思った。看板には「演劇美学」、幟には「比較文化」と書いてある。この看板の下、専門店として店開きして既に四ヵ月余になる。店先には、昼行燈でも灯っていたであろうか。

小さな通りにも、日々、新しい情報が押し寄せる。だが、新奇なことのみ追いかける必要はないであろう。今大事なのは、種々の意味で、根を持つことである。これを読む学生諸君にも、各自の土壤に即した拠点形成の努力が待っているように。動物の如くうろつかざるを得ない者が、時に植物的メタファーの意味を考えてみることも無意味ではないだろう。根を下ろすこと・・・。

(地域文化コース 比較文化研究)

就職委員の一所感

重中義信

この一年間、つまり昭和63年度の就職委員会（委員長：陣崎克博教授）の一員として経験してきたことをもとにして、私なりの感想を述べさせて頂くこととする。

まず、本年度の就職状況についての一つの特徴は、再び訪れた好景気を反映してか、解禁時にはすでに会社関係から内々定または内定の通知を受けた学生が大半を占めたということである。これは、学生側の就職運動の滑り出しが例年になく極めて早かったことと、会社側も早めに学生獲得に乗り出してきたということも意味している。来年度の卒業予定者も、このことを念頭において就職活動を開始して欲しいものである。

ここで、この春に卒業を予定している総合科学部生の進路について振り返ってみよう。昨年末（昭63・12・14現在）のデータをもとに眺めてみると、現4年生の中で、就職決定組が62.4%、進学決定または予定組が18.8%、進路未定者が3.6%、留年予定組が15.1%であった。その中で、就職決定組の学生諸君の行き先が気になるところであるが、上位3番目までをピックアップすれば、例年と同様の傾向を示し、情報処理関係が18.6%、公務員が13.7%、電気機器関係が10.8%であった。ただ、電気機器関係の中でもハード・ソフトの両面を兼ねた情報処理関係の範ちゅうに入れてもよいものが大部分なので、両者を合わせれば29.4%となり、就職決定者の約3割がこの方向を指向しているとみて差し支えないであろう。また、これも本学部の特徴の一つであるが、この中に文系（地域文化・社会文化）の学生が3割近くも含まれていることも注目される。

公務員希望の学生が多いのも、本学部の一つの特徴である。しかしながら、ここで気になるのは、本年度の教員志望者がただの1名であったということである。毎年のように、福山の付属中・高校にまで出かけてお世話になっている教育実習受講生が30名前後もいるという実情を考えると、これは大変に寂しい結果であるといえよう。

ここで、来年度に卒業予定の学生諸君に申し伝えておきたいことがある。それは、「飛翔」のNo.32（昭62・3・20）に掲載された就職委員会の5項目の提言である。その内容は、(1)職種を早く決めること、(2)情報を多角的にキャッチすること、(3)慎重に誠実に果敢に会社訪問に挑戦すること、(4)公務員・教職・マスコミを希望する学生は、3年次ごろから特に計画的に学習をすること、および(5)豊かな人間性を培う努力をすること、であった。

来年度に就職を希望する学生諸君も、本年度と同様に早々と就職活動が開始されると考えたほうがよい。その意味では、上記の提言にある如く、職種を早く決め、情報を多角的にキャッチし、積極的に会社訪問をすることが大切であろう。就職委員や厚生補導係の手元にも、いろいろな情報が集まってきているので、それも遠慮なく利用または活用して欲しいものである。また、公務員や教員を希望する学生にとっては、夏休みまでに採用試験が終わってしまうので、現段階ですでにそれに向けての猛勉強が必要とされる。この春休みが最後の追い込みの時期であると考えた方がよい。特に、教員については、各都道府県で採用減の傾向にあることを念頭におき、採用試験では必ず上位の成績をとるという覚悟でのぞんで欲しい。

最後に、上記の第5項目は極めて大切で、どの方向に進もうとも豊かな人間性を培い、協調の精神を養って頂きたい。また、自己本位にならないよう努力し、横の糸も縦の糸も大切にしたいものである。自分の将来がどうなるかは、すべてこの時期での学生諸君の積極性や努力如何にかかっているのである。諸君の成功を心から祈っている。

（生体行動科学コース）



昭和63年度卒業予定者進路状況

区 分 \ コース	地域文化	社会文化	情報行動科学	環境科学	計
卒業予定者数	38	30	33	35	136
進学希望	5	3	7	16	31
公務員	2	5	1	5	13
教 員	1				1
企 業	26	20	25	14	85
公益法人等	2	2			4
自 営					
無 職	2				2

(63.9.30 卒業者2名を含む)

就 職 内 定 企 業 名

(元. 3. 15現在)

地 域 文 化	社 会 文 化	情 報 行 動 科 学	環 境 科 学
ウベニチ新聞社	カホ無線	沖電気工業	積水化成品工業
ノーベル学習館	中国電気工事	日本電気(2)	山一証券
国際開発センター	富士銀行	野村総合研究所(2)	石川島播磨重工業
住友製薬	イトーヨーカ堂	チチヤス乳業	共同石油
ギミック	日立製作所	日本メディカルサブライ	乃村工藝社
近畿日本ツーリスト	I N A X	宇部興産	日本テクニカルセンター
中国新聞社	読売広告社	広島銀行	マツダ
天満屋	山陽放送	中国電力	日立化成工業
旭通信社	三井信託銀行	日産自動車	野村総合研究所
中国電力	ディスクポート西武	阪神電鉄	九州日本電気ソフトウェア
広島テレビ放送	西洋環境開発	日本タイムシェア	関西日本電気ソフトウェア
十和	三陽商会	中国日本電気ソフトウェア(2)	四国日本電気ソフトウェア
サンデン交通	大阪酸素工業	日本アイ・ピー・エム(3)	中国日本電気ソフトウェア(2)
パイオニア	広島Y M C A	N T Tソフトウェア	
東京海上火災保険	天満屋	日本ユニシス	
山一証券	中国日本電気ソフトウェア(3)	バブコック日立	
エヌ・ケー・エクサ	日本アイ・ピー・エム	日立ソフトウェアエンジニアリング	
福武書店(2)		奈良情報システム	
殖産住宅相互			
ホンダイインターナショナルセールス			
九州国際サービス			
アリス翻訳事務所			
富士通中国ソフトウェアエンジニアリング			
中国日本電気ソフトウェア(2)			

就職体験記

面接あれこれ

就職活動において面接はかなり大きなウエイトを占める。ほとんどの企業は面接、適性検査と英語などの一般教養で志望者をふるいにかけるわけだが、適性検査と一般教養は形だけのものである。出身大学という要素を除けば数度にわたる面接が合否を決する。

10のことを20にも膨らませて話すことのできるG君やM君がうらやましく、自分をうまくアピールすることなどできないだろうと思っていた。友達の「自分をアピールできん人間が社会に入ってその社の商品なり、サービスなりを買い手にアピールできるわけないじゃねえ、会社がとってくれるわけないじゃん」という言葉に、よしうまいこと喋ってやろう、と少しばかり気負って就職戦線に望んだのである。

流通関係のある会社では学生5人同時に集団面接が行なわれ、自分は1番最初に質問を受けるはめになってしまった。それが初めての面接だったためうまく答えられるはずもなく、なかには詩吟を唸ってしまう元気な人もいたりして、こりゃ駄目だなという状態だった。次に行った旅行関係の会社では最後のほうに座れば前のほうの人間がどんなことを喋るか見極めて、自分はそれよりうまく喋れるに違いないと考えたが、前の人間が喋っている間に様々な考えが頭のなかを駆け巡り、いたずらに緊張感が増すだけだった。私大の学生はその方面の指導があるのか概して話がうまい。負けないように面接のマニュアル本などを読んで対策をねってみたりもした。

しかし幾度かの経験で達した結論は、企業はやはり大学時代に「何かしらこれだけはやった」というものを持つ人物を、会社に入ってもやる人物と認めるであろうということである。しかし自分も含めて、学生時代に企業の認めるほどの何かしらをやっている人間のほうが少ないわけで、多くの人間はサークルのコンパ係だったとかアルバイトをたくさんしたという経験しかアピールできない。そうするといきおい表面上のテクニックばかり気にしてしまうようになるのである。就職活動は自分が学生時代に「一体何をしてきたか」をふりかえり反省するときでもある。

地域文化アジア研究 金山 努

電話の切れ目が、企業との切れ目

昨年の好調な就職状況は、「コネなし、特技なし、単位なし」の三重苦に苦しんでいた僕にとって非常に幸運でした。最終的に決まったメーカーのI社は第一志望でもあり満足のいく結果でした。ほんとに運だけで乗り切った僕から後輩の方にアドバイスできる点があるとすれば4点です。

①会社の連絡を待ってはダメ。

②希望の会社を早目にしぼることが大切だけど、しぼりすぎないこと。

③友達の生の情報をたくさん仕入れる。

④自分に（無理にでも）自信を持つ。

①についてはたいいてい会社が解禁前には「追って試験日程は連絡します。」と言うわけですが、僕の回った五社は全て「追って連絡する」前から説明会・面接をやりました。もちろん協定を守る会社もあるでしょうが回りの動きが始まったら、あまり待ちすぎず電話などで当りをつけることが必要かと思えます。

② 早いうちに自分が何をしたいかよく考えることが大切です。希望の業種・企業と手あたり次第では就職活動も大変です。しかし、あまりしぼり込みすぎるとダメだった時はもちろんですが、回って話を聞いている間に嫌になることも意外と多いので、ある程度比較のできる（規模・業種・職种的に）数社を回っておくと後手に回らずにすみます。

③は僕自身にとっては大きかったと思います。OBとの接触の情報から面接で何を聞かれるか、他の大学の状況はなど、実際活動する際には大きくプラスになります。もちろん、Give and Takeなので、情報交換は活発にやっとう方がお互い得です。

④は僕の就職が失敗しなかった一番の原因と言えそうです。大学時代大して何もしてない、特技もないという状態で自信の持ちようもなかったわけですが、やっぱり何かきつとあるんじゃないかと思いこめればしめたもの。どこか自分を認めてくれる人（友人・先輩・恋人・親戚なんでもいい。）と就職活動期に多く会っていると自信もついてきます。自信のあるなしは自己主張しないといけないう就職活動では大きな差になりますよ。

以上、去年の夏を思い出して書いてみましたが、「就職活動っておもしろい。」などと実際に活動してる最中に思うことができれば、確実に就職活動はうまくいくと思います。

社会文化コース 小笠原 弘明

就職体験記

就職活動を振り返って

卒論に迫られている今、就職活動をしたのも随分昔のことのような気がする。私の場合、指導教官が秋以降在外研究で日本を離れてしまうため、必然的に、いわゆる就職活動の時期を卒論の実験に費やすことになった。「この仕事」と希望の職種が心にある訳でもなく、親にコネがある訳でもない。就職できなかったら家に帰ろう…覚悟を決めていた4月。

卒論の実験に手を焼いている横で、研究室のツテ等を通じて既に就職先が決定した人や、足繁く会社訪問をしている人の噂を耳にする。割り切ってはいないものの、何か取り残されたような気持ちがあった5、6月。

実際活動を始めたのは、7月半ば過ぎからだった。出版社、住宅産業と浮気がちだった興味の対象がコンピューター業界に定まったのも（この進路選択、半年前には誰が予想したことでしょう）丁度この時期だった。志望する会社を3社ほどに絞って、分厚い企業紹介誌で調べて会社の人事担当に電話をすると、その内1社は、明日企業説明会を行なうとのこと。翌日、30分ばかりの説明の後「それでは只今から適性テストと面接を一」と言う担当官の言葉に「えっ？」と素直に驚いた私（説明会と称して一次試験を兼ねるのが普通だそうです）。自己PRをろくに考えていなかった私は「説明会なんだから」と開き直り、面接官に卒論の事情を打ち明けた上で、逆にいろいろと質問して企業研究させてもらった。その一週間後に2次面接、さらに一週間後に内定の連絡。後の2社の内、1社はコース宛に求人が来ていたので、学校推薦の形をとって難なく内定。もう1社は8月20日の公の会社説明会に参加し、その場で適性検査、翌日面接を受けて、これも内定を頂いた。

丙午という年の巡り、コンピューターという人手不足の業界、そして例年にない好況・高需要、いろいろな好条件のおかげで、当初の悲観にも関わらず、私の就職活動はシーズンの内に幕を閉じた。今にして思えば、焦る必要なんて何もなかったような気がする（これって終わった者が言える言葉なのでしょうけど）。就職活動、百人百様。1社から内定を貰ってそこでENDマークを付けてもいいし、いろいろな会社を回れるだけ回ってみるのもいい。要は、自分で納得できることだと思う。私は後者の部類に入る訳だけど、業界の知識なんてほとんど皆無の状態だったのが、会社を回りながらも少しずつ知識を身につけていった。コンピューターに携わる仕事の中には、技術職に限らず様々な仕事があること、その中にやってみたいと思える仕事を見つけることもできた。ただ、その選択が正しかったかどうかというのは、入社してからわかることで、入社前はベストだと思っていたのが、実際肌に合わなかった、ということもないとは限らない。逆に、知らずに入社して、偶然割り当てられた仕事にやりがいを感じることもあるだろう。それはまたその時のこと、今はまだ先のこと。後輩の皆さん、そろそろ企業からのラブコールが届き始める頃かと思います。既に目標を定めている方は、怯まずめげず、猛突進して下さい。まだこれといって希望進路もなく、就職活動に一抹の不安を抱えている方、案ずるより産むが易し、活動中に会えることも意外とあるのです。自分なりに納得のいく就職活動をして下さい。

情報行動科学コースⅢ群 広瀬 奈緒巳



京大卒業後40年余の長きにわたり、教職生活を送って参りましたが、非才の者があまり失敗もしないで無事定年を迎えられることができますのは、教職員の皆様方の温かいご指導とご援助にささえられたお陰でございます。

長い間、本当にありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

終りに学部的发展と皆様方のご健勝をお祈り申し上げます。

(社会科学コース)

北 村 靖 治

総合科学部の前身は、旧制広島高等学校で、昭和24年に、その跡地に開校する「皆実分校」に始まり、「分校」「教養部」「総合科学部」と名称変更を重ね今日に至る。その間、36年3月に皆実町から現在の広大本部キャンパスに移転した歴史がある。40年間の想い出となれば、44年2月から始まる広大紛争を避けて通れないでしょう。この頃、私は学生委員でしたので、学生と教官の間をとりもつ役として毎日深夜まで学生相手に苦勞したことを今でもはっきり覚えている。この間のことは通史に待とう。

初代の学長、森戸辰男先生は、旧制福山誠之館中学校の剣道部ご出身で、私もそこだけ同じ経歴ということで、広大プロパーの誠之館同窓会の際には先輩教授が欠席したりすると助手のときから学長の隣席に座らされた苦心の酒盛りが浮かぶ。広大剣道部の顧問をしていた頃、「中・四国学生剣道大会」の記念タオル用に森戸先生にその揮毫をお願いしたことがある。「無心之心」「間不容髪」の対額は、我が家の客間に今もある。後日譚ですが、森戸先生

が毎日習字の練習をされるため、秘書の久田さん(先年物故)は一ヶ月間も墨すりをしたと述べられていた。犯人は北村さんだったのね、学長の字がうまくなったのもねと。昭和40年代の頃でしたか、毎年教養部の有志学生150有余人と教官30人が帯同して芸北の冬山にゆき、スキーに悪戦苦闘したものです。積雪1米、その先頭をラッセルしていたのは他ならぬ北村助手だった。夏は宮島の包ヶ浦海水浴場で部長、参与をはじめ、教官・事務官総出で、有志学生と相和し、共に飲み、食い、歌い、且つ夜を徹して語った三泊四日は楽しい思い出だ。宿泊は、男女とも旧兵舎に寝泊りするわけですが、“蚊”の奴がうるさくて寝られんもんだから「生松葉」をくゆらせて、箒を持って寝所に煙を煽ぎ入れる男・女共同作業のホーキ・ダンスが生れる。ホーキ・ダンスも忘れられない思い出となった。我等が古戦場の包ヶ浦は今も若者の夏キャンプでにぎわっている。

お世話になった総合科学部を去るに当り、心から総科の発展を念じて止みません。

(生体行動科学コース保健体育講座)



退官の言葉

総科を去るにあたって

佐久間元敬

この新春放映のテレビで司馬遼太郎とテレビキャスターとの対談があった。御覧になられた方もいらっしゃるであろう。私は日頃同氏の歴史観に親しみを覚えている。同じ年頃の気安さかも知れない。その中で日本の近代の歴史は約40年をサイクルとして大きな転換をしてきたとの説を述べられた。司馬氏によれば、明治維新から日露戦争までの40年は新生日本の興隆期、次の40年は昭和20年の敗戦まで。日本が破局に瀕した時期である。その後の40年は、戦後の復興期を経て未曾有の繁栄を謳歌している現在までにあたる。さてこれからの40年日本はどのような道をたどるのであるのか、と言うようなお話であった。

わが総合科学部についても、私にはその変遷に大きな波があるように感じられる。総合科学部の前身である教養部が皆実分校として誕生したのは昭和34年である。その後昭和43年、44年の大学紛争を経て昭和49年に総合科学部として出発することとなる。この間約15年である。次の15年間は試行錯誤の連続であるといつてよいであろう。それでも新生学部のエネルギーをもって大学院問題にも一応の終止符を打ち、一昨年より学生増募を機として新コース発足に踏みきって次のサイクルに入って来ている。出発早々、例の不幸な事件が起ったが、学部はそれを克服して新しいまとまりを取り戻しつつあるように見える。さて、次の15年の後に学部はどのように変貌しているであろうか。

今年は就職委員として多数の求人各社の担当者と面接した。各社の総科に対する評価は驚くべく高い。総科の卒業生獲得にかける熱意は並大抵ではない。昭和52年には中国新聞に連載され話題を呼んだ“悩めるパイオニア”の記事を今読み返してみても、世の中の変わり身の早さに驚かされるのは私だけではないであろう。

これからしばらく他の大学でまた数学を教え、研究に従事することになる。広大の外からの総科の眺めは果してどのようであろうか。

(数理情報科学コース 基礎科学研究)

別れの言葉

安藤貞雄

このたび、一身上の都合で、定年を2年後に控えて勇退することとなった。昭和52年4月1日付で、島根大学文理学部から本学部へ配置換えになってから、早くも満12年の歳月が流れてしまった。まことに *Tempus fugit* の感が深い。

思えば、国立大学の教員生活の最後を広島大学という立派な大学で過ごしたことは無上の幸せであったが、その間、いわゆる「弟子」を養成することができなかったことは非常に残念なことであった。勇退を決意した動機は複合的であるが、大学院に英語学の専攻がないという事情があったことは確かだと思われる。ただ一つの心残りは、外国語コースの学生諸君との付き合いがあまりにも短かったことである。

チューターをしていて、大学を変りたいという希望を何人かの学生諸君から聞いた。大学ならどこでも同じとは言わないが、広島大学くらいしっかりした大学ならば、ここにも十分勉強ができるのではないか。

その昔、イギリス北部の田舎町ジャローの修道院に、当時ヨーロッパ随一の学者と言われた尊師ビードが住んでいた。その孫弟子アルクインはカルル大帝に招かれてその文教政策に携わり、中世ヨーロッパの学界を指導した。

このことは、学問は地方にいても、やる気さえあればできるということを示している。

学生諸君のたゆみないご研鑽と、広島大学の無限の発展を祈って別れの言葉としたい。

(外国語コース 英語)

文 明 誌 載

飛 行 機



この春も、一体どのくらいの学生が「海外逃亡」してきたのだろう。春休みはとくに、“co-op 海外の旅”は盛況。皆さん本当にお金持ちで…、というよりは、皆さん本当に勇敢な…、という方に近いような、やや臆病な私である。つまり、自分の体が空中に浮くということにどうしても抵抗を感じてしまうタイプなのだ。

南米コロンビアからはるばる広島大学へやってきた青年医師がいた。あるとき私が、飛行機にどうしても乗れないという話をすると、彼はこう反論した。「私たちには生まれる前から定められた運命があります。何年何月何日に死ぬ、ということは決まっています。その日がくれば、家の中にいても、道を歩いている、必ず死ぬ。だから、その日が来ていなければ、飛行機に乗ってもだいじょうぶです」

彼は暫く英語でまくし立てていたが、しまいには辞書を持ち出して、「destino」の項を私に見せた。そこには日本語で「運命」とあった。

日本は島国だから、外国へ行くにはどうしても、車や電車を使うことができない。その点大陸にある、例えばヨーロッパ諸国と比較して、日本人は「国際的感覚」に乏しい、などと非難するのは絶対に酷なことだと思う。

日本だってもし大陸と地続きだったら、私のような人間も、自転車をこいで外国へ行ってみせるんだから。

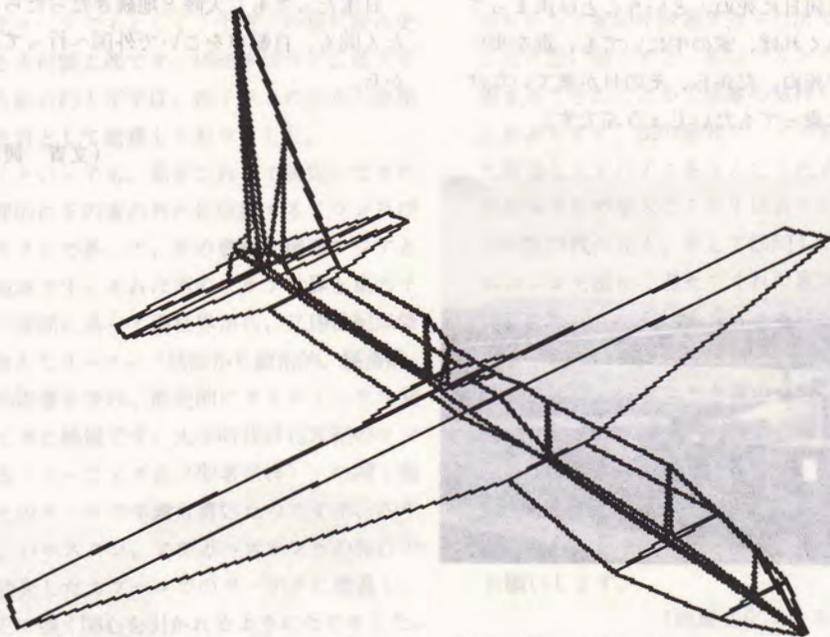
(文責 渡場加代)



広島大学にまる40年勤務したことになる。しかも東千田地区から一步も出ることはなかった。広島文理科大学に入学したのが昭和21年であるから、戦後の広島大学の移り変わりと共に歩んできたといえる。去るにあたって感慨もひとしおである。昭和39年文学部から教養部に移ったころは、歴史学科は図書館の3階に仮り住いをしており、間もなく附属小学校跡へ。現在の建物に移ったのは昭和43年の3月であった。教養部には、和気あいあいの空気がみなぎり、のびのびと教育と研究に携ることができた。学生も活気に満ちていた。わたくしたち若手教官の有志で「若手の会」をつくり、自分の専門研究について発表したり、教養部の将来像について熱心に語りあった。大学紛争が教養部改革、ひいては総合科学部創設の契機になったことはよく言われることであるが、今は全く忘れ去られた「若手の会」の存在も改革の底流としての役割を果たしたと思う。教養部時代のよき伝統は引き継いでもらいたいものである。

わたくしが教養部へ赴任したころは教官数も100名に満たなかった。総合科学部の創設によって、いまでは220名を超える充実ぶりである。しかも、教官の専門はあらゆる分野にわたっている。まことに刮目すべき学部である。総合科学部に学ぶ学生は幸せというべきであろう。しかし、学生諸君はこのめぐまれた環境を本当に生かしているだろうか。このめぐまれた環境を真に生かすためには、総合科学部の学生は他学部の学生より2倍の勉強をしなければならないと思う。そこではじめて、広く深く学び、社会に出て役立つ総合的な能力を身につけることができるのである。すぐれた同僚にめぐまれながら、諸先生方から、吸収するところが余りにも少なかった自省の弁でもある。総合科学部の発展を切に願ってやみません。

(地域文化コース 日本研究)



特別研究論文題目紹介

I 卒業論文

コース (指導教官)	指 名	論 文 題 目 名
地域文化		
(山下)	浅野 幸志	フィリピンの政治と文化—農民運動を中心に—
(古東)	阿部 満洋	ハイデガー・『存在と時間』研究
(志邨)	寺西 啓子	マッカーシズムの時代的背景
(山下)	浜田 公 司	アフリカ地方都市研究
(村上)	波呂 純子	「筑豊」に関する地域研究
(佐竹昭)	森重 美紀	近世中期における芸備島嶼の村落構造—享保5年安芸郡倉橋島人家御改帳(海越・尾立・才の木・松原)の分析
(川辺)	網本 健次	「アメリカ航空産業における規制と競争」
(古東)	荒木 康介	ハイデガーの時間論
(山下)	今瀬 直美	観光についての文化人類学的考察—インドネシア・パリの事例を中心に—
(朝倉)	岩井まほろ	広島における野坡流俳諧一定着の様相について—
(古東)	大原 理志	ベルクソンにおける持続と直観
(金田)	岡本 芳枝	李禹煥論
(朝倉)	香月美和子	近世畿島の史跡・名勝—その成立過程の様相について—
(川辺)	角谷 潤子	1960—70年代 アメリカにおける企業PRの確立
(楠瀬)	金山 努	チベット問題の背景—中国の少数民族政策を通して—
(戸田)	金原美代子	フランスのことわざ研究—動物のことわざを通してみる社会背景—
(金田)	河原 志穂	ヨハネの黙示録における「刑罰の火」
(戸田)	北崎 朋子	消費社会の幕明けと女性像—バルザックのエステルを通して—
(朝倉)	佐野由美子	芸備地方に於ける俳諧の伝播—竹原・三原地方の様相—
(永尾)	島田 智子	芥川龍之介の文体について—その「語り」についての研究—
(頼)	生田 尚子	大長宇津神社祓戸講の研究
(朝倉)	竹中 淑恵	畿島の雅楽
(志邨)	田坂 るり	アンテペラムサウスのイメージとその形成過程について
(金田)	立石 典子	トウールーズ=ロートレックにみるジャポニズムの展開
(楠瀬)	丹花 智恵	「マラヤにおける華人労働者の役割」—錫業を中心として—
(古東)	辻 和夫	ベルクソン哲学における持続の問題
(頼)	雉野 孝文	黄表紙の研究—音通による言語遊戯の考察—
(川辺)	西川 容美	アメリカにおける、コカ・コーラとペプシ・コーラの販売競争と広告効果
(渡辺則)	新田 千絵	日本水泳史の一考察
(古東)	服部 泰典	ソシュール言語理論の研究
(戸田)	古川 裕子	Albert Camus 研究—幸福について—

(永尾)	堀川 道代	川端康成の文体について―「名詞十である」の用法を中心として―
(立川)	前田 淳子	アルチンボルド研究
(渡辺則)	安河内 朱美	湖白庵諸九尼研究
(原)	山口 雅弘	小劇場演劇の演劇空間
(友田)	山下 悟子	近世イギリスにおける子供と家族生活
(金田)	山室 知可子	ポップ・アート研究
社会文化		
(中峯)	宮崎 直敏	銀行経営のコンピューター化について
(芝田)	石橋 潔	被爆体験と被爆者意識をめぐる―研究―社会意識研究の枠組の中で
(鯨坂)	岡本 光治	「小劇場運動における都市へのまなざし」
(木本)	青山 幸樹	戦後日本石油化学技術の歴史的発展過程の分析 ―巨大化=技術革新停滞説をめぐって―
(西澤)	池田 耕一	韓国自動車産業
(鯨坂)	慶田 律華子	大衆の変容
(伊藤護)	大元 真也	自然公園制度の現状と課題
(舟橋)	小笠原 弘明	「アイルランド独立革命期におけるプロテスタント勢力の動向」
(西澤)	河原 広樹	西太平洋経済圏における中国・香港―アジアNIE Sの事例研究―
(志村)	北原 憲	研究開発型中小企業に関する一考察
(清水)	坂本 美穂	母中心家族
(鯨坂)	柴床 伴子	「『コミュニティづくり』の現状と課題」
(西澤)	新迫 明美	ブラジルにおける累積債務問題の現局面
(岩田)	杉浦 千穂	アフガニスタン事件の考察
(木本)	鈴木 美緒	日本自動車工業の発展過程の分析―1950年代を中心として―
(岩田)	角田 雅清	ゴルバチョフ外交の一考察～グローバリズムの分析を中心として～
(芝田)	高村 武彦	生物兵器の危険性に関する一考察
(舟場)	武田 信一	北九州地域の低成長期における産業構造の変化と地域産業政策
(鯨坂)	中村 和宏	「西ドイツの都市計画制度の社会学的研究―日本との国際比較を中心として―」
(志村)	秦 久美子	サービス経済化と外食産業
(志村)	福田 弘	現代の雇用問題と雇用政策―労働力需給のミスマッチを中心として―
(舟場)	福原 正昇	高度成長期と安定成長期における日本の産業構造及び地域構造の変貌過程
(伊藤護)	藤田 晋治	総合保養地域整備法（いわゆるリゾート法）の法社会学的考察
(舟場)	藤本 貴子	日本自動車産業における部品調達と現地生産
(木本)	古田 雅美	「現代オートメーションにおける技術的基礎の分析」
(芝田)	宮田 知章	『芸術の社会的意義に関する一考察』
(富井)	森 亜弓	借地・借家法における正当事由論―ことに金銭給付との関連を中心に
(甲斐)	渡辺 昌子	日本における余暇社会の展望
(舟場)	SAIFUL BAHARI AHMAD (サイフルバハリ アマッド)	“The Characteristics of Japan Electronics Industries and the Relations with Multinational Structures in Asian Countries” “日本の電子工業の特徴とアジアにおける多国籍企業の展開”

情報行動科学		
(正法地)	佐々木 かおり	歴史資料の統計学的研究
(藤原)	入野 潔	身体的魅力の規定因に関する計量的研究
(樹下)	永浜 公太郎	MS-DOS上でフロッピーディスク記録手法の高信頼化に関する研究
(小林樟)	松尾 浩徳	アフリカマイマイ陰莖牽引筋の収縮に対する神経伝達候補物質の効果
(水上)	青木 千加子	3階層誘導微文ゲーム問題に関する研究
(前田)	青山 慎	輝度と色の多様性を用いた図形のジャギの処理に関する研究
(重中)	石井 いずみ	太陽虫における単離軸足の超微形態的研究—軸足の収束と単離軸足観察—
(天野)	衛藤 由美子	アフリカツメガエル初期発生における組織構築
(正法地)	胡子 幸穂	計量生物学の研究
(小林樟)	太田 憲之	軟体動物アフリカマイマイ中枢神経節抽出物質の生理活性
(内山)	太田 光栄	ヒト白血病細胞(HL-60)の分化関連遺伝子の研究
(宗岡)	神田 智子	コナガニン神経節生理活性物質の単離・精製と生物活性
(小野)	桐山 栄治	論理とラムダ計算
(久保)	栗栖 武宏	確率過程に関する研究
(樹下)	栗原 志朗	可観測性を考慮した論理回路の故障位置指摘手法に関する研究
(水上)	黒木 真里	コンピュータグラフィックスにおける自然物の形状生成に関する研究
(上里)	神山 健二	痛みの制御に関する実験的研究
(内山)	坂本 和也	ヒト白血病細胞(HL-60)の分化誘導因子に関する研究
(小野)	沢田 一茂	ラムダ計算の研究
(杉本)	篠原 順子	フローティング効果の個人差に関する研究—誘発電位を用いて—
(杉本)	清水 秀明	嫌悪刺激によるラットの情動行動と脳内電気現象
(黒川)	高木 繁	職場集団におけるリーダーシップと対人関係ルールに関する実証的研究
(天野)	高倉 暁彦	甲状腺ホルモンによるアフリカツメガエル変態期の肝細胞成熟・分化機構について
(樹下)	鳥飼 雅史	可観測性を考慮した組合せ回路のテストパターン生成手法に関する研究
(上領)	仁木 敏朗	酵母ペルオキシソーム系遺伝子の発現に関する研究
(藤原)	半田 浩康	説得コミュニケーションにおける態度変容と認知要求に関する研究
(藤原)	平砂 清美	映像志向性と商品への関与のタイプが広告に対する態度に及ぼす効果に関する実験的研究
(黒川)	広瀬 奈緒巳	他者に対する立場の違いが不安に及ぼす効果—主体的立場・客体的立場の検討—
(宗岡)	藤澤 祐子	イガイ平滑筋収縮を制御する生理活性物質
(堀忠)	藤中 紀子	背景脳波と課題遂行に及ぼすウルトラディアン・リズムの影響
(渡辺)	松見 和佳子	ニワトリ胚培養強膜細胞の増殖性と接着性を調節する環境因子
(水上)	松本 友希子	エキスパート・システムに関する研究—効率的のパターン照合のためのルールベースの構造化—
(磯道)	水本 好信	人工知能の手法を用いた列車ダイヤ作成システムの研究
(堀忠)	吉岡 朋子	大学生及び高校生の睡眠・生活習慣に関する調査研究
環境科学		
(堀信)	野中 哲郎	賀茂川 沖積低地の地形変化

(佐久間)	植木 伸	代数曲線論
(竹之内)	遠藤 孝司	流路内の物質拡散における流路壁と流速分布の影響
(成定)	高橋 義信	日本における進化論の一展開—今西錦司氏の生物社会論における社会概念の検討—
(大林)	内田 直樹	$(La_{1-x}Ca_x)_2(Cu_{1-y}Ni_y)O_4$ の超伝導と赤外線吸収
(竹之内)	大西 三男	有限要素法による物体まわりの流れ解析
(山下和)	岡崎 賢	有機分子薄膜の光電子変換機能と高効率化
(藤原 祺)	岡田 和馬	DNA共沈法を用いた溶液中の微量重金属の定量
(深宮)	尾崎 哲也	ハッサク未熟果中の極性成分
(高橋史)	川上 知子	畑における人間のインパクトと雑草の群集構造の特徴—自然農法畑と慣行農法畑における比較研究—
(吉田)	木曾 敏浩	ホモロジー群とその応用
(中根)	木村 仁典	開発行為と森林(アカマツ林)保全—リモートセンシング手法を用いて—
(根平)	久米 有子	広島市内の樹木の植物季節学的研究—コナラ属を中心として—
(福岡)	坂井 紀之	地理地形要素による最低気温推定に関する気候学的研究
(近藤)	竹田 礼次	センブリ属稀少種 <i>Swertia punicea</i> の組織培養による大量増殖法の確立
(保田)	津江 広人	1, 3E, 5Z-Undecatriene の合成
(山下和)	土田 直子	ダブルビーム光変調法による有機分子薄膜の光電的研究
(倉石)	鶴崎 健一	矮性および正常オオムギ子葉鞘のインドール酢酸生成経路の検討
(古前)	中村 惣一	スジグロカバマダラの性フェロモンに関する化学的研究
(岡野)	長瀬 英雄	中国産ニガキ科植物種子の極性成分
(栃木)	永瀬 博	島根県平田市別所地区における地滑り調査とその考察
(栃木)	西本 健治	1988年7月に発生した広島県加計地区土石流災害調査について
(岡野)	林 由利香	日本産ニガキ科植物中のクアシノイド化合物とそれらの生物活性
(佐藤博)	原 郁男	富士火山1707年(宝永4年)噴出物の岩石記載と1気圧溶融実験
(於保)	平山 恭之	山口県東部における三郡変成岩の地質構造
(檜原)	福田 豊	酸化物高温超伝導体の磁性
(豊島)	福原 聡	E S R法による光合成光化学系II第1安定電子受容体の研究
(水本)	藤原 利浩	ナヴィアーストークス方程式の有限要素近似
(藤井博)	松熊 訓子	Bi系およびLa系高温超伝導体における非磁性元素による置換効果
(檜原)	水谷 文彦	過塩素酸アンモニウム (ND_4ClO_4) における微量スピンの ^{17}O の動力学的運動の考察
(林)	山口 真弓	マンサクの花の香気成分の化学的研究
(保田)	山本 亜紀	茴香の精油成分と組織培養
(福岡)	龍 絵理子	有明海における海陸風に関する気候学的研究

II 修士論文

研究科 (指導教官)	指 名	論 文 題 目 名
地域研究		
(清水)	加藤 正英	農民の政治とサクダル運動—フィリピンにおけるヴァナキュラーポリティックス(vernacular politics)の解説とその実践に向けて
(芝田)	高力 美由紀	マルクスにおける「全体的に発達した諸個人」についての一考察

(福嶋)	清水 照子	『グリム童話』の変遷に関する一考察
(佐藤)	中村 嘉孝	「アンデス高地における農牧民の物々交換、市場交換・・・ペルー南部を中心に」
社会科学		
(小林文)	池田 美津子	現代中国語における<一い>の研究
(佐藤信)	入江 伸子	アンデスの宗教変容：16世紀～17世紀―エスノヒストリーの視点から―
(小林文)	氏 永 和哉	現代中国語に於ける“在…V”と“V在”の研究
(佐藤信)	岡田 浩樹	韓国農村における「マウル」の自律性
(金田)	小笠原 成章	泉鏡花研究―境界と語り―
(金田)	小田 貴之	フンボルト言語哲学の研究
(永尾)	加土 恭子	女性の呼称よりみた「古事記」の言葉に関する一考察
(森祐)	中谷 文彦	1950年代後半のアメリカ軍部における論争
(金田)	藤土 千浩	倫理的思考について―端緒となる現象の構造―
(志邨)	松井 健史	レーガン政権の新通商政策と日米通商摩擦の背景
(金田)	山本 信介	現存在の開示性と事実の隠蔽性
(村上)	荒木 一視	農村の空間構造の研究
(八木)	苑 復 傑	社会構造と女性の地位―社会経済史的視点からの考察―
(永尾)	袁 葉	川端康成作品研究―その「非現実」について―
(金田)	大段 郁夫	メロディーの知覚
(石井)	Cahn, Miriam	「指針」（1978年11月）と日米防衛関係
(小林文)	柴田 徹	秋瑾研究―日本留学期における思想的変革を中心に―
(石井)	SUKKOM SOMPRASONG	Japan's ASEAN policy in the Post-Vietnam Era (1975-1985) 〔ベトナム戦争後における日本のアセアン政策〕
(永尾)	曾 秋 桂	夏目漱石研究―漢詩と小説とのかかわり―
(永尾)	陳 紅	日本語の動詞についての研究―「を+動詞」を中心にして
(木村)	涂 鳳 美	通貨先物取引と通貨先物オプション取引について
(戸田)	戸板 律子	シャンソン 歌の中のパリ
(日南田)	中川 雄二	19世紀ロシア農村とじゃがいもの普及 ―新作物普及の農村社会への影響についての社会経済史的一考察―
(佐藤信)	鍋島 正次郎	「アンデス農民経済の人類学―生計・物々交換・市場―」
(小林文)	西井 美穂	近代中越関係の研究―東遊運動期のファン・ボイ・チャウを中心に―
(木村)	鮑 昭 大	外国為替リスク・ヘッジについて
(永尾)	ミウソワフスキヤロスワフ	道元禅の研究
(小川)	御手洗 崇	「時間と自己現在―フッサールの時間論」
(金田)	南 裕 子	キルケゴールにおける自己と瞬間の問題
(石井)	陸月 規子	第2次世界大戦時のアルゼンチンの中立
(金田)	本嶋 智章	『存在と時間』に於ける現存在の時間性
(喜多村)	李 春 生	戦後日本の高等教育政策―歴史的・比較的考察―
(小林文)	呂 黎 燕	石橋湛山の政治思想―その対中国認識と行動の軌跡―

生物圏科学			
(藤井)	井上	武	CeTiIn (T=Ni, Pd, Pt) の物性研究
(福岡)	井上	智博	三次盆地における都市気候学的研究～特に霧との関係について
(関根)	大城	直樹	亜熱帯島嶼における集落立地をめぐる<環境>
(藤原)	來嶋	和美	高齢者の孤独感と社会的ネットワークに関する研究
(坪田)	倉持	淳美	降水および大気凝縮水中の水溶性無機イオン種に関する研究
(藤原)	神山	貴弥	態度変容に及ぼす elaboration の効果に関する研究
(黒川)	小島	美樹	親子関係における相互依存性の分析—中学、高校生の場合—
(黒川)	坂田	桐子	性役割態度と勢力行使ストラテジーに関する実験的研究
(高橋)	篠田	貴	山火事跡地生態系の塩類循環における再生植生の果たす役割
(山下和)	竹田	一彦	ミセル電解法により作製したポルフィリン薄膜の基礎的物性および光電子変換素子への応用
(松田)	内藤	勝	PL=2~12 GeV/c での陽子-陽子弾性散乱の位相差分析とスピン軌道相互作用
(高橋)	中村	克典	マツ穿孔性昆虫 (いわゆる松くい虫) 数種の保持する線虫の種類相について
(檜原)	林	宏昌	価数揺動化合物 YbInCu ₂ の磁性
(堀信)	古田	充宏	都市近郊農村の混住化に関する社会地理的研究—広島市安佐北区院内を事例として—
(栃木)	眞弓	孝之	高知県伊勢川地区の地すべりに関する研究
(古前)	味方	和樹	ヒトクチャタケに含まれる甲虫の誘引物質
(渡部)	室重	昌史	アモルファス物質の局所的原子配列の理論的研究
(藤井博)	叶	威	水素化に伴う高温超伝導体の物性変化
(倉石)	田崎	康二	高等植物体中における植物ホルモンの動態
(宗岡)	池田	哲也	ユムシ腹側神経索より単離した生物活性物質
(重中)	石田	正樹	Studies on the Mechanism of Cell Elongation in <i>Blepharisma japonicum</i> . A physiological Mechanism How Light Stimulation Evokes the Cell Elongation プレファリズマにおける細胞伸長反応機構に関する研究 光刺激により誘起される細胞伸長反応の生理学的機構
(天野)	高田	裕美	ツメガエル肝実質細胞でのエストロゲン依存性エストロゲンリセプター誘導における甲状腺ホルモンの影響
(上領)	丹	浩伸	酵母ペルオキシソーム蛋白質の局在化に関する研究
(渡辺)	津田	敏彦	An analysis of growth regulating factors secreted by the chick embryo cells. : partial purification and characterization of the heparin-binding growth factor ニワトリ胚細胞が分泌する細胞増殖調節因子の研究 —ヘパリン結合性増殖因子の分離とその作用—
(豊島)	長塚	富雄	光合成光化学系II第一電子受容体の再構成と電子移動過程の解析
(小林尊)	堀	克彦	軟体動物アフリカマイマイにおける心拍動調節に関する研究
(武森)	前川	浩二	偽基質によるチトクロムP-450の不活性化機構：分子軌道法的解析
(重中)	箕岡	真里	太陽虫の生活環に関する研究～核分裂およびシスト形成について～
(武森)	宮崎	明子	光化学系II反応中心におけるチトクロム b ₅₅₉ の化学量論と環状電子移動過程の解析
(渡辺)	八木久美子		ニワトリ胚繊維芽細胞は軟寒天培養によって軟骨に分化する —細胞レベルおよびプロテオグリカンレベルでの解析—

自己発見の旅 ～フリーでチープなツアー～

香掛美保

よれよれのTシャツに薄汚れたチノパン、背中にはザック。「地球の歩き方」を片手に中国大陸を歩く。1日1,700円で生活できる国。外国人専用のホテルで優雅に観光などしていたら、中国人とのふれあいが無い。中国人と同じレベルで生活してこそ中国がみえてくる。中国人の宿泊するホテルを選び、食事も屋台などでとる。それは日本の便利で豊かな生活とはかけ離れており、あたかもサバイバルのようなハードな旅行。そこに中国旅行の良さがあるのだろう。去年の夏、中国は日本の学生でいっぱいだった。そのほとんどがバックパッカーでチープな旅行を心がけていた。私もその一人だった。

たしかにバック旅行のうえ、外国人専用のホテルで宿泊し、ホテル内で食事をとっていたら中国の景色、雰囲気に触れるにとどまるかもしれない。

しかし、だからといってたかが1ヵ月程度中国人と同じレベルで暮らして中国とその人々を理解できるか？フリーツアーはじかにその国の人々と接し生活に触れ、生活習慣をかいま見ることができる。私達はそれらを通して短絡的に中国を知った気になり得意になって中国（人）論を展開していなかったか？

日本であたり前のことが中国では違う。その違いを通してある程度中国を理解できるのかもしれない。しかし、むしろそのあたり前を振り返り、その行為の根拠となるものを見つめ、日本を、つまりは日本人である自分の一面を理解することの方がまず必要な事なのではないのだろうか。自分を知らない人間が他人を、ましては国民性を真に理解できるはずもない。

飛翔箱

今の日本社会は情報に囲まれお金を出せばたいいことはできる。その中でともすれば自分がどれほどのものかを忘れがちだ。中国フリーツアーのチープシップもトレンドだ。海外においてまでトレンドに左右されることなく、つねに自分を発見する旅にするべきだ。



社会科学コースあれこれ

戸 敷 聡

総科自体がその様なものであるが、この社会科学コースに来る人々も、特に「これを専攻しよう！」という目的意識をもっている人は少ない。私の知る限りでは「自分が何をやりたいのかははっきりしないが、ここくらいしか来るところがなかった」という人が多かった。また、社会科学方法論や外国語を除き、「三年になってこの様な勉強をしたい人はこういう授業をとりなさい」という指定もない。よって二年生の時間割は散漫なものになりがちである。

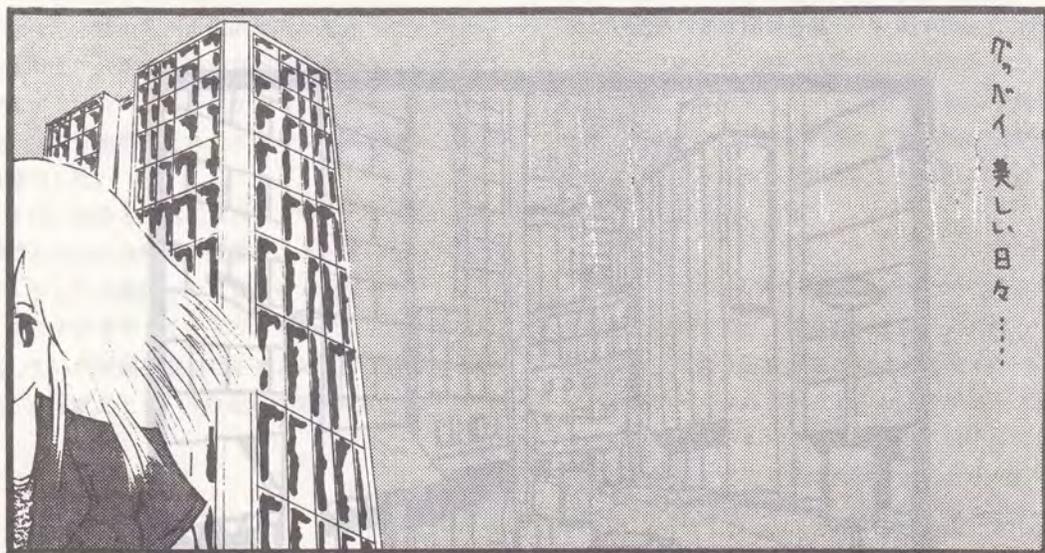
(なお社会科学コースの二年生は二年の内に単位を取れるだけ取ってしまおうという傾向があり、全コマ埋めてしまうという例が非常に多いが、全ての講義について単位を取られるかどうかは別問題である) こうして確とした目的意識もないまま二年の頃は過ぎてゆくのである。だが散漫としたカリキュラムの中から二年生達は自分は本当はどの様なことについて勉強したいのか、とりあえずの解答を導き出さねばならないし、また次第に導きだされてくるものである。これが即ちゼミの決定というものである。

社会科学コースの二年生にとって、自分等が来年度に所属するゼミを決めるのは最大のイベントと言える。水面下の動きは既に年末から始まっている。普段教官の研究室などには寄りつきもしない学生達がこの時ばかりはこぞって教官室参りを行う。「○は××ゼミ志望だ」「△ゼミには○人もの志望者がいる」という会話が年末から新春にかけて交わされる。89年は1月の終りにゼミ志望調査が行われた。志望者が3人を超えたゼミでは調整が行われる。志望者の内幾人かは「泣

き」を見なければならぬ。かくして二月末には各自のゼミが決定する。

「私は××を専攻し

たい」ということを決めてそれに向けて一心不乱に走っていくのも一つのあり方であろう。だが一方では前述した様に漫然とした勉強の中から自分が本当に打ち込みたいことをゆっくり見つけていくことも一つの手であろう。総科はむしろ後者の行き方に適していると思う。



編集後記

広報委員 米重文樹

今回広報委員ということで初めて「飛翔」の編集に関わるようになった。今号に関して言えば、事務（厚生補導係）、教官（広報委員）、学生（編集委員）の3者による打合せが都合2回持たれたが、具体的な内容・記事配分についての確認とは別に、編集に携わる学生委員からの悩み・疑問が出され、「飛翔」そのものの持つ意味・性格にまで話が及んだ。無理もない、1,500部近くも大量に刷ったところで、自動的に各教官・関係学生研究室に配られた以外の大半は、気が向いた学生が手にとってポイで総科のロビーで寒風にさらされ、あげくのはては、たまった古いものから捨てられるというのですから。しかし、これも無理のない話といわざるをえない。学生が手にして読んだところで、授業で知っている先生が何か書いていたりしていれば興味半分で読んでそれで終り、又、学生編集委員が一生懸命考えて作った記事にしても、要するに「どうってことない」と言ったところがフツウのヤングの素直な気持であろうと思われるからである。このことはおそらく、同じくフツウのヤングである編集委員からしても、結局は自分たちの本当に言いたいこと、本当に面白いと思うこと、本当に腹の立つことは「飛翔」には書けない、だから書いていない、ということにもなる。 「飛翔」は、大学側の発意により創られ、主

たる作業の大半を事務におんぶしつつ、教官・学生の共同編集の形をとった学部広報誌である、そして、まさにそこに「飛翔」の限界があるのであって、学生側からすれば妙に枠にはめられたような気分になるというのも又無理からぬ話である。他学部にはない独自のものであるというだけで「やる気」がおこるわけでもないし、又、「総科」意識（「所属意識」）にしても、正直に言えば、ちょっとした現実的きっかけで総科に入学・在籍しているわけであるから、ギャップが生じるのは当然であろう。

以上、訳の分からぬことを書きましたが、今回の編集で学生側から手を引きたいといったような意見も出ました関係で、おかしな編集後記になりました。

広報委員

米重文樹

立川孝一

渡辺一雄

小村堯

表紙デザイン

舟木展子

学生編集委員

内山清美

川本瑞恵

小松千尋

中家伸之

野村幸代

編集後記

この世の中には一種の情報伝達手段として「文字」が存在し、たいした情報であろうがなかろうが、文字を組み合わせて文章にしてしまえば、その情報は固定されてしまう。固定された情報は万人の目に触れる可能性を持っている。しかしながら、人間は誰でも自分に必要な情報はとり入れても、不必要な情報にまで興味を抱くことはない。どんな名著と言われる書物でも、それを読まない人の方が多いのである。

前置きが長くなってしまったが、以上のことを「飛翔」に関して考えてみると、飛翔を編集するにあたって、総合科学部の全学部生、全大学院生、全教官が読むことを前提にする必要性を感じなくなる。とすると、飛翔の発行部数も現在の1千数百冊から半分程度に減らしても十分なのではないだろうか。それでは広報誌としての意味がないという反論が出るかもしれないが、精一杯広報誌たろうと編集されている今の飛翔の大半が無用の長物となっているのが実情である。

次に考えてみたいのが、編集委員会の在り方である。私は特に広報誌然とした編集委員会の場を持つことに反対である。それは別に会議の内容というわけではなく、会議に参加するメンバーの問題なのだ。いかにも無理押しされて選出されてしまった方々に義務感のみに駆られて出席していただきたくないのである。（そんなことを言っていると誰も出席しないのは目に見えているが。）編集の仕事が好きで、文章を書くのも好きで、煩しい雑用でもこなせる人が編集をすべきなのだ。（そういう人間は恐らく存在しないだろう。）少なくとも編集しながら、自分のやっていることに疑問や不安を感じることはない人が編集委員として望ましい。学部の広報誌とは言っても所詮は“PTA会報”やら“町内会誌”と大差ないのだから。なぜか昔から伝統になっていて、たいして読まれることも期待せず、今回限りだからと我慢して作ってしまうものなのである。それだからこそ「下手の横好き」的行動をする人材が望まれる。

私の考えに反論がお有りの皆様、どうぞ飛翔にその意見を投稿してください。

（文責 内藤千恵美）

学生編集委員

山崎明子

伊藤多喜子

海住隆雄

桑原秀行

下野寿子

学生編集委員

戸敷聡

布川克彦

福永弘樹

宮尾佳道

矢野泉

内藤千恵美

'89総科カレンダー（後期）

[10月]

○成績発表

1年生は20単位以上とっておいた方がよいみたいです。優良可にこだわるか、取れば良いと安心するか、あなたの考えで判断してください。

○後期聴講受付（10月11-24日）

手続きのやり方は前期と同じです。だんだんと寒くなる季節がら、よく考えて時間割を組みましよう。

[11月]

○大学祭

チケットが飛びかった後には、3日間のお祭り騒ぎがやって来ます。いろんなイベントがあるので暇な人も参加して一緒に楽しもう。

○秋季ソフトボール大会

総科ってソフトが好きなのねえ、とぼやく前に思いきりプレイボール！

[12月]

○冬休み（12月24日-1月7日）

大学の冬休みって案外と短いのです。でも、クリスマスもあるし、お正月もあるし、遊んだり騒いだりする道具立ては揃ってますよね。

[1月]

○コースガイダンス

1年生の為の最後のガイダンスです。このさい疑問や不安は徹底的に聞いておこう。文→理、理→文、どちらも不可能ではありません。妥協せずに自分のやりたいことをやろうよ。

○4年生卒論締切

4年生が再び姿を見せる時です。でも機嫌が良いかどうかはわかりません。

[2月]

○後期試験

過去をカバーしようと思うなら気合いを入れて勉強に励むべきです。寒いだの眠いだの言っている暇はありません。

[3月]

○卒業式

卒業生の皆さん、おめでとうございませす。またどこかでお会いしましょう。

○春休み（2月22日-4月8日）

やっと春になりました。いかがでしたか、この一年。失敗も成功も全て踏み台にして来年度に向けてSTEP・UP!です。では、また…。

(注) なお、この他に1年生は合宿研修があります。

9月初旬の予定ですが、コース選択の参考になるので、是非参加してみましよう。

(文責 下野寿子)

